普済寺遺跡

―― 発掘調査報告書 ――

1989

箕輪町教育委員会

普 済 寺 遺 跡

―― 発掘調査報告書 ――

序

箕輪町教育委員会
教育長　堀口　泉

沢川に箕輪ダム建設が計画実施されて以来、それに伴う埋蔵文化財の調査は、毎年のように続けられてきました。関係した地元の各区においても、ダム建設を記念した事業を実施しており、昭和62年度には長岡区が行い、引き続いて63年度は南小河内ダム記念公園事業が計画されました。計画予定地は普済寺遺跡の一部に入るため、調査を実施し記録保存を行ったのであります。小河内地籍には上の平城跡をはじめ、阿弥陀様が存在していることなど、歴史的には早くから開けた地域であります。発掘調査によって歴史が実証されることは大変意義のあることであります。

調査の結果につきましては、各章に記すとおりですが、本報告書が小河内の歴史を記す一助となれば幸いに存じます。

本調査実施にあたり、深いご理解をいただいた地元委員会の方々、また、発掘調査に従事下さいました調査団の皆様に深く感謝申し上げます。

例　　言

1．　本書は、長野県上伊那箕輪町大字東箕輪3634-2番地他に所在する遺跡の発掘調査報告書である。

2．　本調査は、箕輪町教育委員会が実施した。

3．　発掘調査は、昭和63年10月４日～10月20日まで実施した。

調査終了後に整理作業を実施し、引き続き報告書作成を行った。

作業の分担は次の通りである。

土器の復元　　赤松　茂、井上武雄、根橋とし子

遺物の実測・トレース　　赤松　茂、根橋とし子、宮脇陽子

遺物拓影　　井上武雄、根橋とし子

挿図作成　　赤松　茂、宮脇陽子

写真撮影・図版作成　　赤松　茂

4．　本書の執筆は、赤松　茂、柴　登巳夫、根橋とし子、宮脇陽子が行った。

5．　本書の編集は、赤松　茂、井上武雄、柴登巳夫、根橋とし子、宮脇陽子が行った。

6．　石質鑑定は、調査団長樋口彦雄氏にご教示いただいた。記して感謝申し上げたい。

7．　出土土師質土器・陶磁器については、竹内一徳氏にご教示いただいた。記して感謝申し上げたい。

8．　遺構図版におけるスクリーントーンの太点は焼土を表す。また、遺物図版におけるスクリーントーンの太点は、内面黒色処理を表し、網点は陶器断面を表す。

9．　出土遺物及び図版類はすべて箕輪町郷土博物館に保管されている。

本　文　目　次

題　　字　　団　長　樋口彦雄
序　　教育長　堀口　泉
例　　言
本文目次
挿図目次
付表目次
図版目次
第Ⅰ章　遺跡の立地……1
第1節　位　置……1
第2節　自然環境……2
第3節　歴史的環境……3
第Ⅱ章　調査の経過……5
第1節　調査に至る経過……5
第2節　調査団……5
第3節　調査日誌……6
第Ⅲ章　調査の結果……8
第1節　調査経過の概要……9
第2節　遺　構……9
1．土　壙……9
2．集石炉……15
3．配　石……15
第3節　遺　物……15
1．縄文土器……15
2．土師質土器・陶磁器……18
3．土製品……20
4．銭　貨……20
5．石　器……20
第Ⅳ章　まとめ……26

挿　図　目　次

第１図　位　置　図……1
第２図　周辺遺跡分布図……4
第３図　全　体　図……8
第４図　土壙実測図　1……10
第５図　土壙実測図　2……11
第６図　土壙実測図　3……12
第７図　土壙実測図　4……13
第８図　土壙実測図　5……14
第９図　集石炉・配石実測図……15
第10図　出土縄文土器拓影図　1……16
第11図　出土縄文土器拓影図　2……17
第12図　出土土器・陶器実測図　1……19
第13図　出土土器・陶器実測図　2……20
第14図　出土土製品実測図……20
第15図　出土銭貨拓影図……20
第16図　出土石器実測図　1……20
第17図　出土石器実測図　2……22
第18図　出土石器実測図　3……23
第19図　出土石器実測図　4……24
第20図　出土石器実測図　5……25

付　表　目　次

付表１　土 壙 一 覧 表……27
付表２　出土石器一覧表……28

図　版　目　次

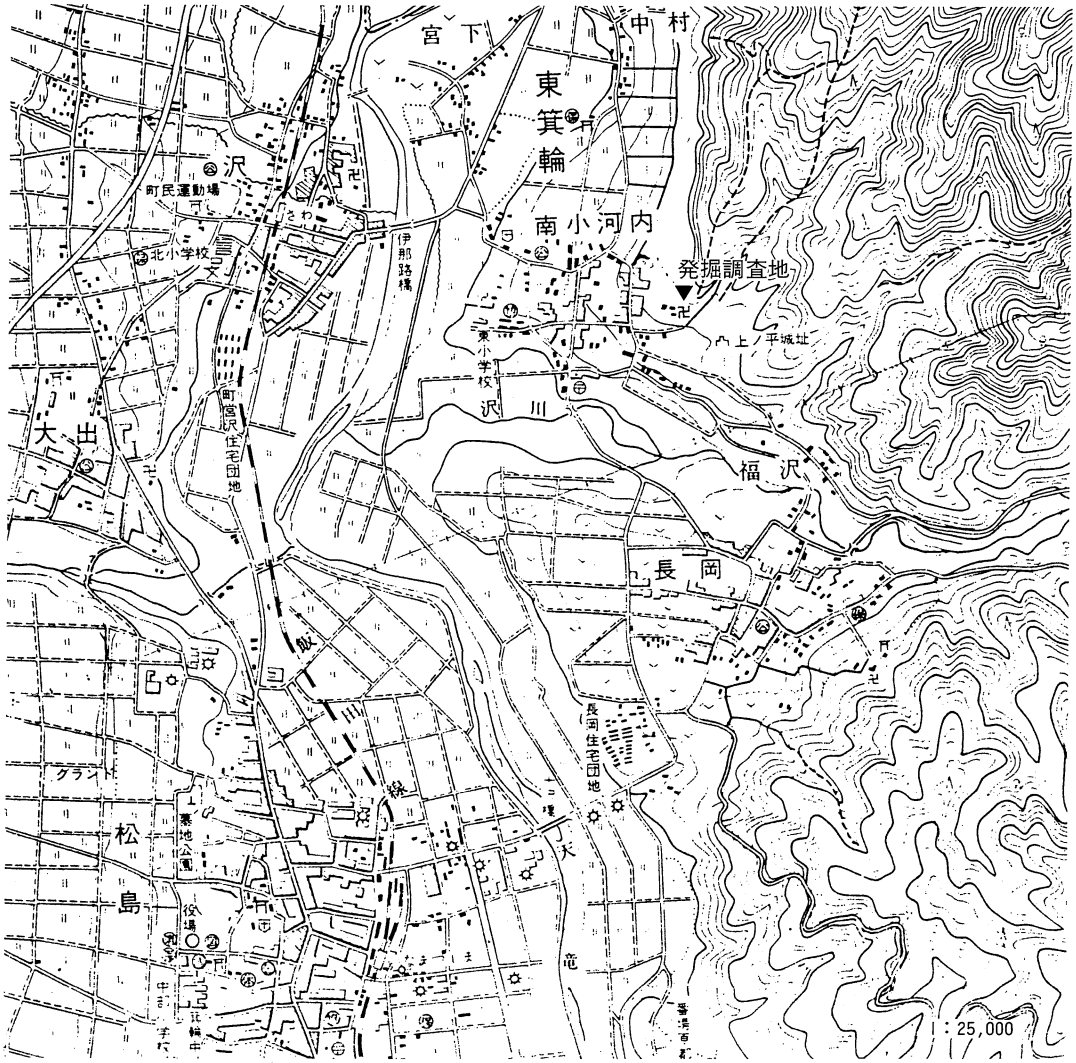
図版１	調査地近景、調査地全景
図版２	１号土壙、２号土壙、３号土壙
図版３	４号土壙、５号土壙、６号土壙
図版４	７号土壙、８号土壙、９号土壙
図版５	10号土壙、11号土壙、13号土壙、16号土壙
図版６	17・22号土壙、25号土壙、18・30・32号土壙
図版７	19号土壙、20号土壙、21号土壙
図版８	23号土壙、28・30号土壙、29号土壙
図版９	31号土壙、34号土壙、35号土壙
図版10	集石炉、配石
図版11	調査風景・調査参加者
図版12	出土縄文土器１、出土縄文土器２
図版13	出土縄文土器３、出土縄文土器４
図版14	出土打製石斧、出土磨製石斧・磨石・敲石・凹石
図版15	出土耳栓・石鏃・銭貨、出土石臼、出土石鉢

第Ⅰ章　遺跡の立地

第1節　位　　置（第1図）

普済寺遺跡は、長野県上伊那郡箕輪町大字東箕輪3634-2番地他に所在する。天竜川左岸段丘上の南小河内区は、長岡区との間に流れ出す沢川の北に位置し、普済寺遺跡は南小河内区の東北から南にかけて小台地状に広がり、東方の山麓からは知久沢川が流れ、日当たりが良く、住居を構えるに最適と思われる。また、この遺跡の南300mのところには、県の史跡に指定されている上の平城跡がある。

標高は743m前後を示し、天竜川面との比高差約70mを計る。



第Ⅰ図　位　置　図

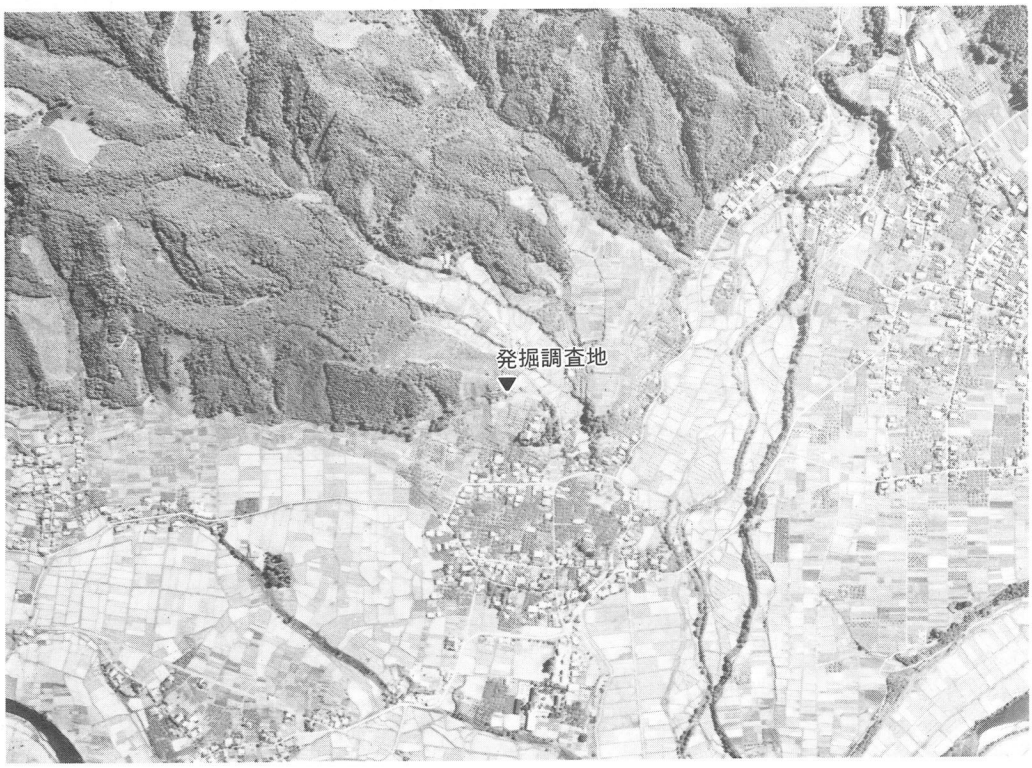
第2節　自　然　環　境

箕輪町は、東の三つ峰（1400m）から、西の黒沢山（2100m）、北は漆戸部落（720m）から、南は木下部落（700m）の広がりを持つ地域である。

このほぼ中央を天竜川が北より南に流れて、伊那谷を形成している。ここ箕輪町は、天竜川をはさんで河岸段丘と数多い扇状地とが独得の地形を作り出し、一帯は遺跡分布の密な地域になっている。

天竜川左岸の竜東地区は1㎞前後と狭く、扇状地と小台地が連続している。その間を西流する沢川は流路が10㎞に達している。沢川の右岸には東方の山麓から丘陵状に西方に延びた上の平城跡が位置し、さらにその北には、知久沢川を隔てて普済寺遺跡が位置するのである。

普済寺遺跡は、南小河内区の北東の山麓から南へ小台地状に広がり、区の菩提寺である普済寺の所有地内にある。南斜面は日当たり、水の便も良く、自然災害も少ないところから、住居を構えるに最適と思われる。しかし今回発掘した区域は、この小台地の北西側に傾き、風当たりも強いことから、住居には適さず、それにともなう倉庫や貯蔵穴、または埋葬の墓地として使用されていたのではないかと思われる。



遺　跡　周　辺　地　形

第3節　歴史的環境

天竜川左岸段丘上一帯は、竜東地区と呼ばれ、ここには長岡区、南小河内区及び北小河内区が東部の一単位として位置している。地形は天竜川沿岸水田地帯から小段丘や扇状地を経て伊那丘陵になっている。沢川の扇状地にある長岡区は、土地が肥沃であるため昔から人々の生活の舞台であった。長岡古墳群のある長岡の台地上には、以前は30基前後が存在していたが、現在では10基ほどの古墳が確認できるのみである。沢川を隔てた南小河内地籍の舌状台地上に、上の平城跡が位置している。城跡の西方300mの小台地上に普済寺遺跡が存在する。この小台地の南斜面は、日当りも水便も良く住居を構えるのに最適だが、遺跡のある北西側は、風当りが強く、原始から墓地等として使われていた可能性が強いとされている。また、上の平城跡の関連から、12世紀頃の遺構の存在が言われている。この普済寺遺跡をとり巻くそれぞれの遺跡を概観してみたい。

上の平城跡（遺跡）　上記の通り遺跡地は城跡として県史跡に指定されている。また、先土器時代からの遺物も検出され、柳葉型尖頭器等町内では最も古い遺物の一つが確認されている。縄文時代に入ってからの遺物も豊富で、特に石鏃の検出数は多い。

日向前遺跡　縄文時代中期の土器、石器が確認されている。

殿屋敷遺跡　縄文時代中期、加曽利E式土器や局部磨製石斧が確認されている。

所開橋遺跡　地形的にみて水便が悪く生活には不適地であったようで、確認調査の結果では遺構・遺物ともに検出されなかった。

一之沢遺跡　縄文時代の石器から10～11世紀頃の住居址や遺構・遺物が出土した。

源波古墳　昭和62年に発掘調査されており、台地の最上部に位置する円墳で、馬具等の豊富な副葬品を多数出土している。

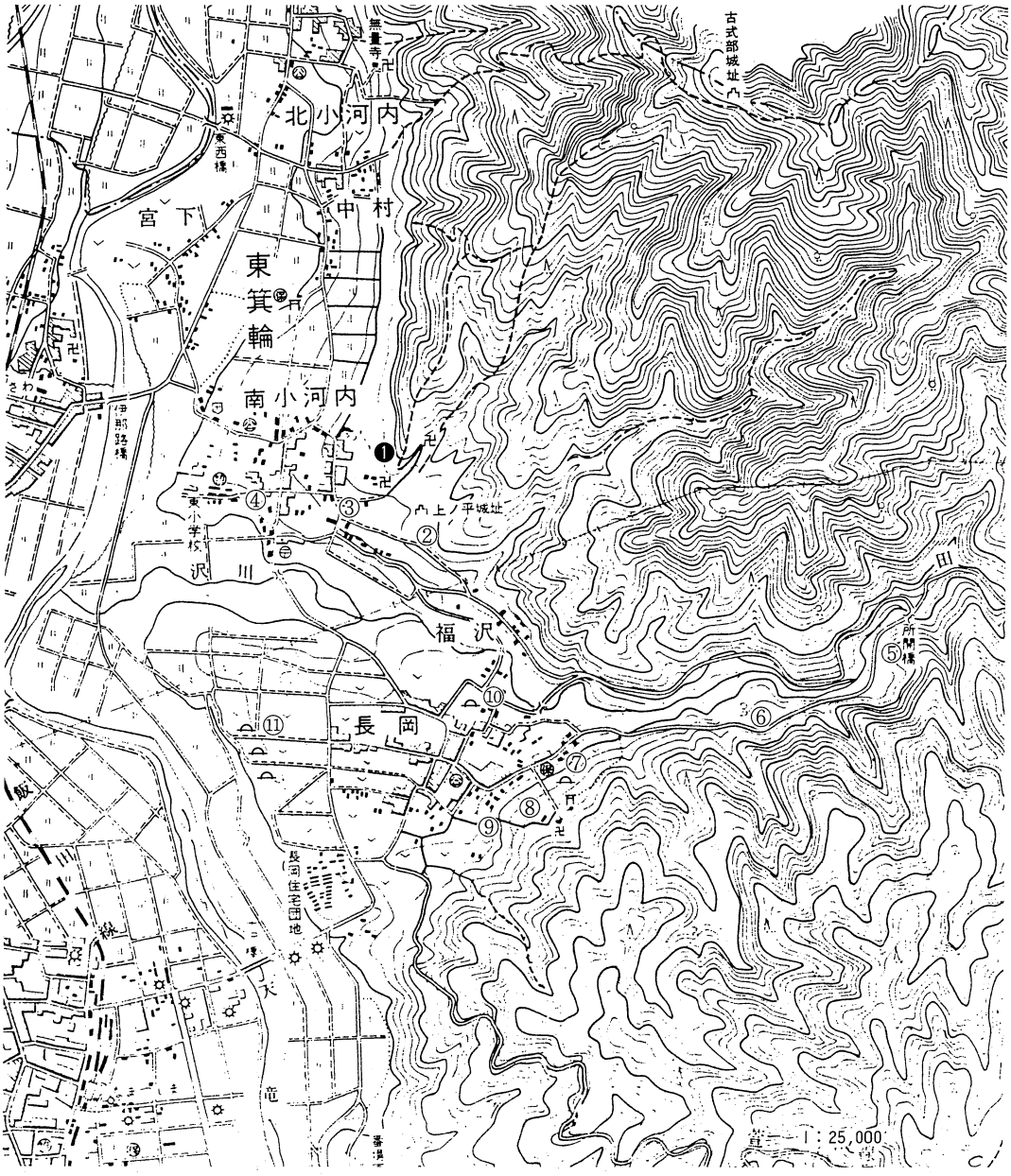
源波遺跡　縄文時代前期末～中期初頭の土器・石器及び、平安時代の住居址2軒と土師器が出土した。

角道遺跡　縄文時代中期初頭から晩期にかけての土器・石器が確認された。

角畑古墳　円墳で、石室を形成する自然石は2～3トンを有し、天井石の架構状況も一部残っている。

羽場の森古墳1号～3号　段丘突端に位置する円墳で最も形状が残っており、3基が連なっている。2号墳では馬具等の副葬品が検出されている。

以上のように、普済寺遺跡の周辺では、先土器時代から平安時代末期にかけての人々の生活の跡を伺うことができ、歴史的環境は実に密度が高いといえよう。



❶ 普済寺　② 上の平　③ 日向前　④ 殿屋敷
⑤ 所開橋　⑥ 一之沢　⑦ 源波古墳　⑧ 源波
⑨ 角道　⑩ 角畑古墳　⑪ 羽場の森古墳1～3号

第2図　周辺遺跡分布図

第II章　調 査 の 経 過

第１節　調査に至る経過

沢川にダム建設の計画が始まったのが昭和40年代の中ごろのことである。数年の調査期間を経てダム建設事業が始まったのが昭和55年度からである。ダムの建設は直接関係する長岡新田の方々は当然のことながら、長岡区、南小河内区にもいろいろな面で大きな影響を及ぼすことになった。そのため関係した区では、ダム建設を記念して、それぞれ記念事業を計画実施した。

昭和62年度においては、長岡区がダム記念公園計画事業として、グランドの設置、資料館の建設、古墳移転復元事業及び周辺整備等を実施した。そして昭和63年度においては、南小河内区がダム建設を記念して事業を実施する運びとなった。事業実施の計画予定地は、普済寺遺跡という周知の遺跡であり、その範囲に含まれていると予測された。計画段階において、現地を２回踏査し遺物の表面採集等を行った。その結果、縄文時代の土器片等を採集したため、遺跡範囲内ということが確実となり、発掘調査を計画したのである。前教育長樋口彦雄氏を調査団長とし、昭和63年10月より発掘調査の運びとなったのである。

第２節　調　査　団

イ）調　査　団

団　長　　樋口彦雄

担当者　　柴登巳夫　箕輪町郷土博物館主任学芸員

調査員　　赤松　茂　箕輪町郷土博物館臨時職員

調査員　　宮脇陽子

ロ）発掘調査団員

荒川織光、井上武雄、大槻泰人、岡　　章、岡　　正、唐沢光国、小池久人、小島久男、小林信義、清水すみ子、戸田隆志、中坪侃一郎、根橋とし子、野村金吉、藤森秀男、松田幸雄、水田重雄

ハ）事　務　局

堀口　　泉　箕輪町教育委員会教育長

上島冨作夫　箕輪町教育委員会社会教育課長

上田　明勇　箕輪町教育委員会社会教育係長

柴　登巳夫　箕輪町郷土博物館主任学芸員

石川　　寛　箕輪町郷土博物館学芸員

赤沼　悦子　箕輪町郷土博物館臨時職員

赤松　　茂　箕輪町郷土博物館臨時職員

第3節　調　査　日　誌

10月4日（火）晴

本日より発掘調査に入る。最初にテントの設営を行う。その後地元の田沢総委員長と倉田委員長両方と、黒河内係長の御来席をいただいての調査団結団式及び神事が取り行われた。また、草苅りや整地をして駐車スペースが作られた。午後調査区内に3ヶ所のテストピットを開け、土層堆積状況を確認した。中からは、内耳土器片や陶磁器片及び縄文土器片を数点出土した。

10月5日（水）曇のち雨

東側より重機で表土はぎが開始され、続いて上面の整地が行われた。東側と西側ではかなりの傾斜がある。整地終了後、一部東側にグリッドが設定されグリッド掘りに入った。しかし、午前11時すぎ、雨が降り出し作業を打ち切った。

10月8日（土）曇

重機による北側と西側の表土はぎとグリッド掘りが行われた。続いて遺構の確認が行われ、いくつかの土壙らしき落ち込みを検出した。出土遺物は土師器が主であった。また、B－11グリッドからは縄文時代の耳栓が出土した。珍しい出土品に作業の手をしばし休めて見入っていた。

10月11日（火）晴

グリッド掘りが継続して行われる。A－10グリッド周辺から遺構が検出され1号土壙とした。また、D－11、H－14、J－14の各グリッドからも2号、3号、4号土壙が検出された。整地された調査区北側、西側にグリッドの設定をした。

10月12日（水）曇のち雨

グリッド掘りを行う。開始時より小雨は落ちていたが、11時頃から本降りとなり作業を打ち切った。

10月13日（木）曇のち晴

グリッド掘りと平行して土壙の半割が開始された。1号、2号土壙は中世の火葬墓か、内耳土器片や焼土が出土した。3号～5号土壙からは土師器片が出土した。また、新たに7号～11号の土壙が検出された。

10月14日（金）晴

土壙の半割が行われる。土壙内から縄文土器片が出土したものもある。一方ではグリッド掘りも継続され遺構の確認が行われた。かつての長いも栽培のため、遺構が削平されていた。土壙は全24基が確認された。

10月15日（土）晴

土壙の半割が続く。また、測量の終了したものから全掘に入った。

10月19日（水）晴

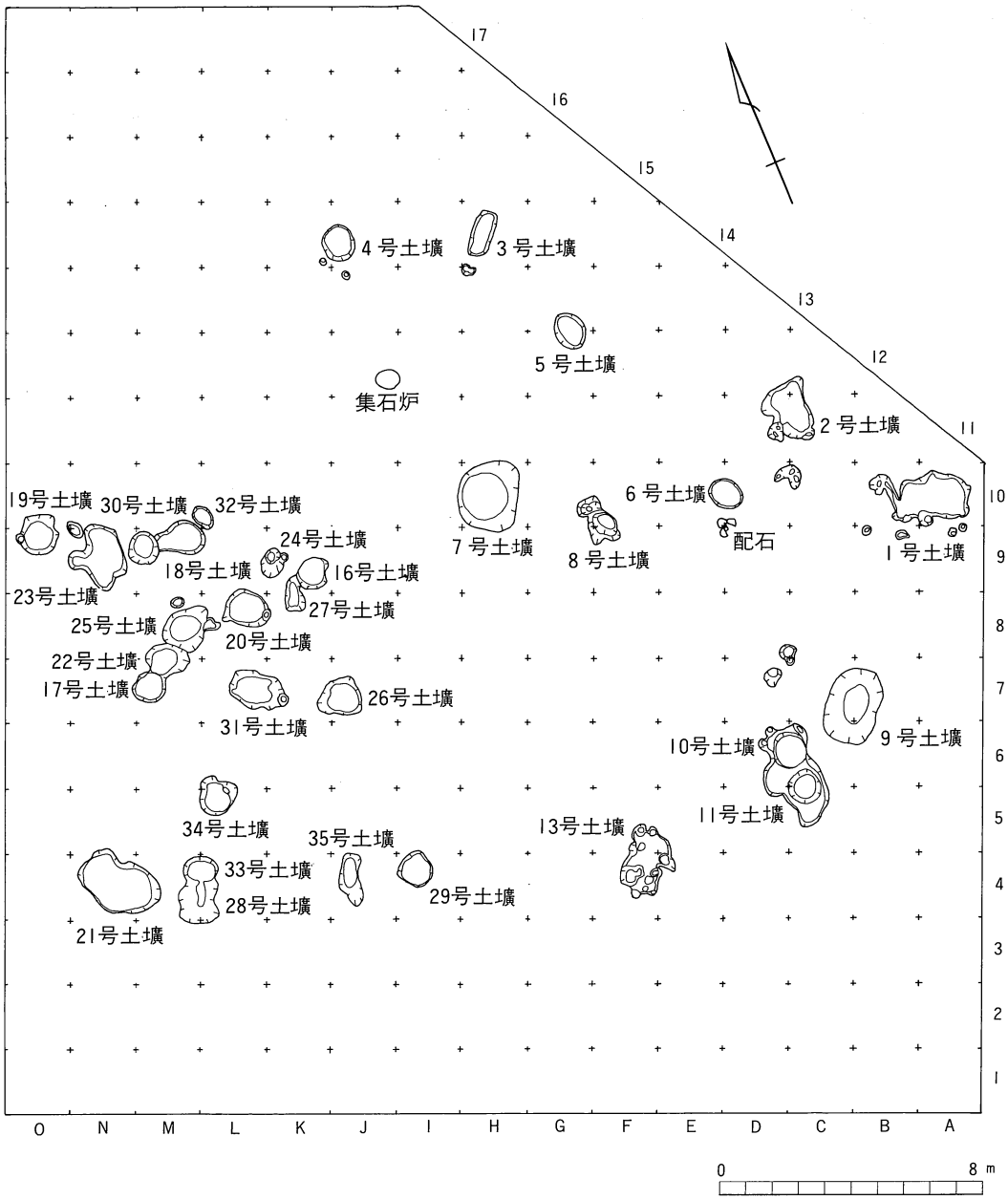
土壙の半割及び全掘が継続される。調査区東寄りから整地が始まり、残されていたグリッドをすべて掘削した。

10月20日（木）

朝から全体測量を行う。また、テントや発掘用機材の撤収も行われた。午後、博物館にて道具の手入れを行った。本日にて普済寺遺跡の発掘調査が終了となった。

10月21日から室内にて土器洗い、注記、実測、拓本、トレース、執筆等の整理作業を開始した。

第Ⅲ章　調査の結果



第3図　全　体　図

第１節　調査結果の概要

遺跡は、普済寺の所在する小舌状台地上一帯に広がると思われる。箕輪ダム記念公園の建設は、その北斜面に計画され、調査はまず遺跡の遺存状態と調査範囲を確定するために、手掘りによる幾つかの試掘坑を開けた。その結果、畑造成による地形の変化の見られない約900 ㎡を発掘調査の対象とし、実施した。調査は、試掘による土層確認により、上部の耕作土を重機を使用して除去し、一辺２ｍ四方のグリッドを設定して遺構の検出を行った（第３図)。

調査の結果、土壙32基、集石炉１・配石１、を検出した。各遺構の時期については、32基の土壙のうち、出土遺物の観察から縄文時代中期初頭に属するもの23基、中世に属するもの９基であり、集石炉は縄文時代中期初頭、配石は中世である。尚、遺物は縄文土器、内耳土器、陶器、石器が出土しており、その詳細は後述するものである。

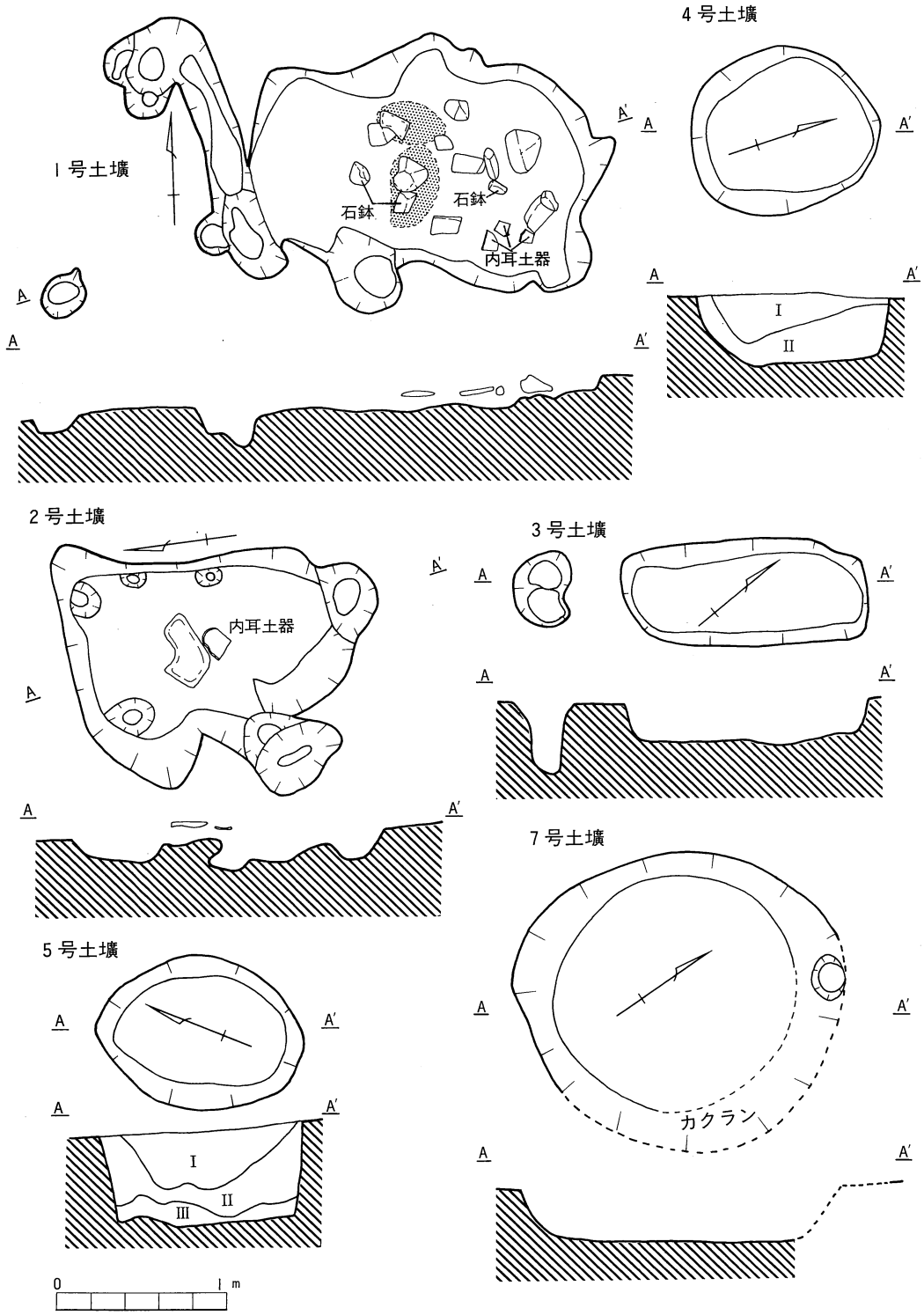
第２節　遺　　構

１．土　　壙

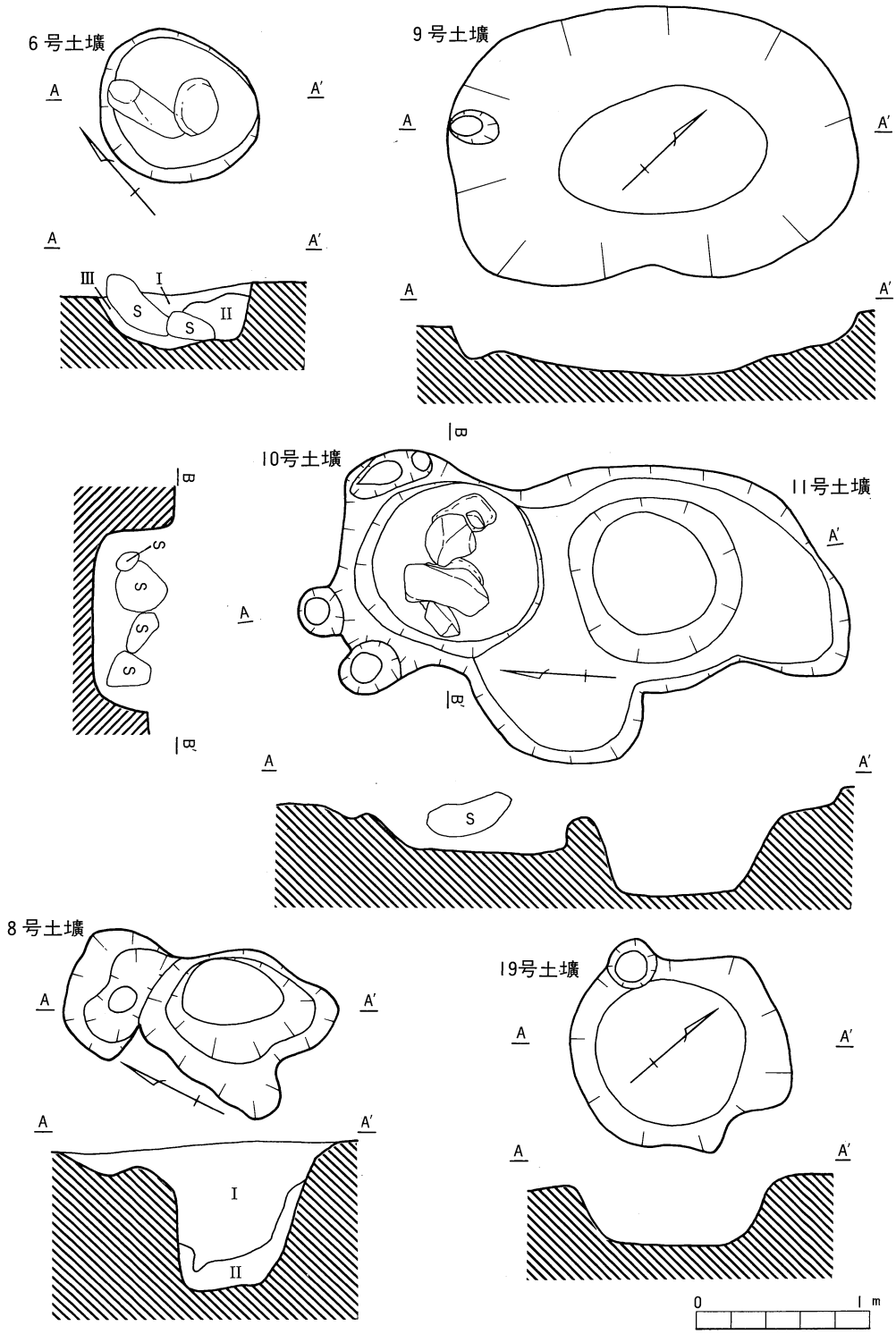
上面確認時において、土壙とする落ち込みの総数は35であったが、明確に土壙といえる人為的なものは最終的に32にとどまった。そしてその特徴や伴出遺物から、前述の通り縄文時代中期初頭と中世の２時期のものに分けることができる。

縄文時代中期初頭に属する23基の土壙は、その分布状況からみるとＬ－６グリッドを中心にして19基もの土壙が集中しており、土壙群を形成しているようである(第３図)。それも、１つ１つの土壙が一定の間隔を持っているのではなく密接しており、重複するものも見られるもののその切り合いの新旧は、はっきりとつかめられない。形状をみてみると、平面及び底面がほぼ円形のもの（６・10・16・17・19・20・22・25・26・29・30・33・34号）と、楕円形を呈するもの（11・18・24・27・28・31・32号）と、それに不楕円形のもの（８・21・23号）に分けられる。覆土は、単層のものも分層可能なものも比較的しまりは強い。また、６・10号土壙にみられるように、内部に大型の転石の混入が認められるものがある。６号土壙においては、50cmもの長い柱状の石が横たわっているものの、その性格については不明である。10号土壙においては、中央部にほぼ東西方向に重なるように７個の大型の転石が混入しており、壁際には４穴もの小穴が認められる。出土遺物は、土器・石器がみられるものの、土器に至っては完形もしくは復元可能なものはまったくなく、すべて細片であり出土量も少なかった。石器も、打製石斧、磨製石斧がみられるが、やはり出土量は少なかった。

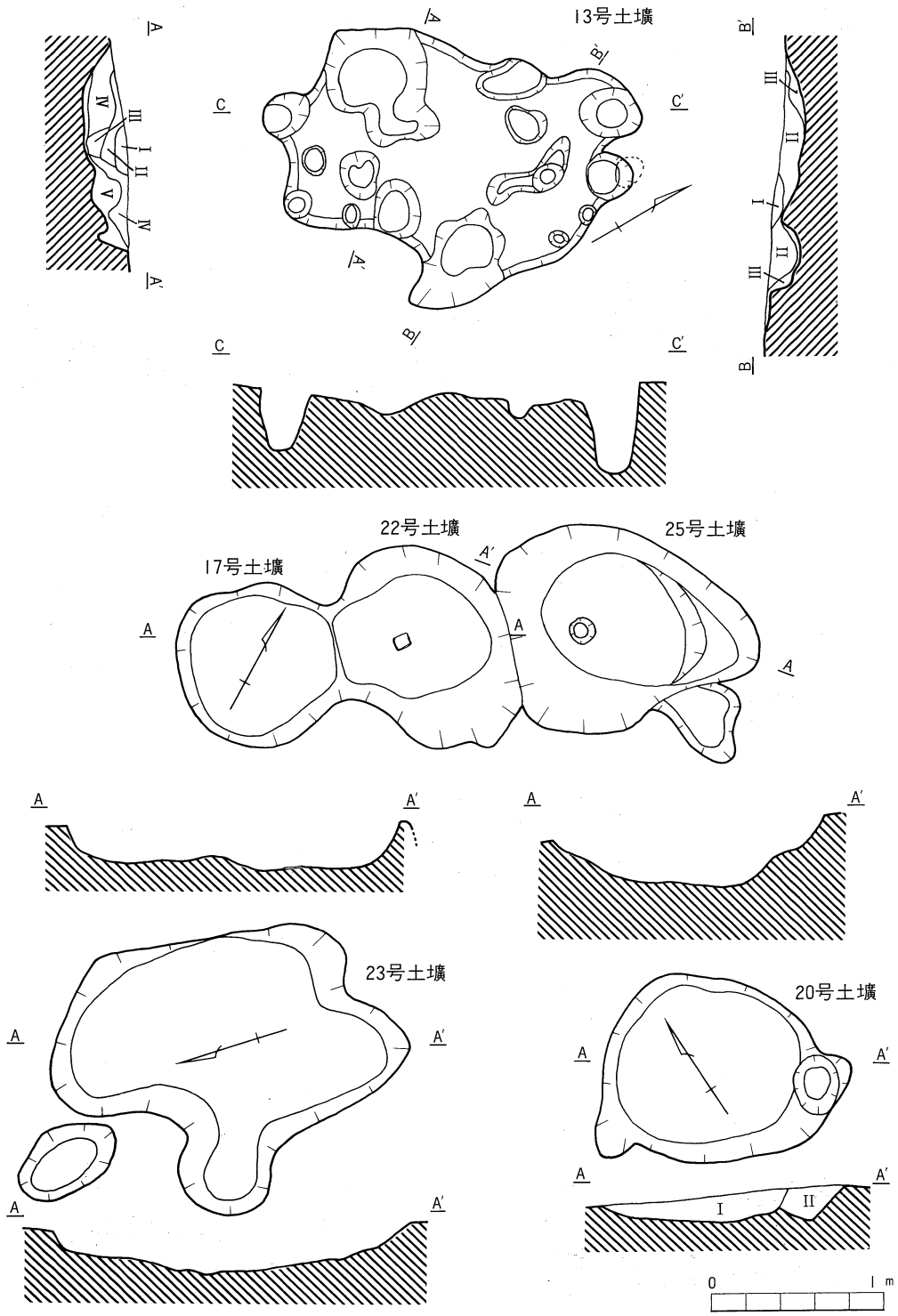
中世に属する９基の土壙の内、８基が調査区の西側から北側にかけて点在し分布をみせる。形状は、円形のもの（４・７号)、楕円形のもの（３・９・35号)、不整楕円形のもの（１・２・


1号土壙
石鉢
石鉢
内耳土器
A
A′
4号土壙
I
II
2号土壙
内耳土器
3号土壙
7号土壙
カクラン
5号土壙
III
0
1 m

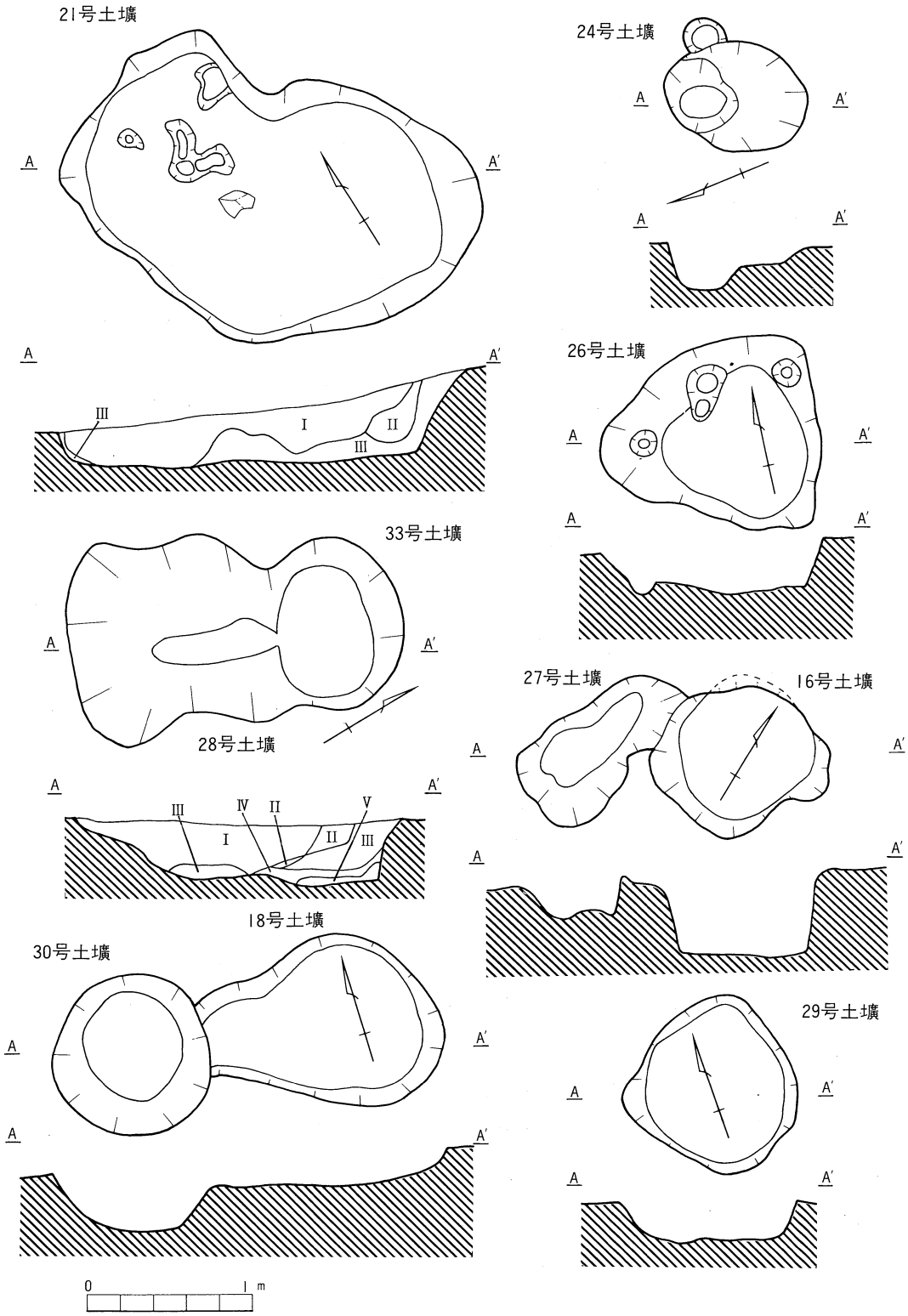
第4図　土壙実測図　1



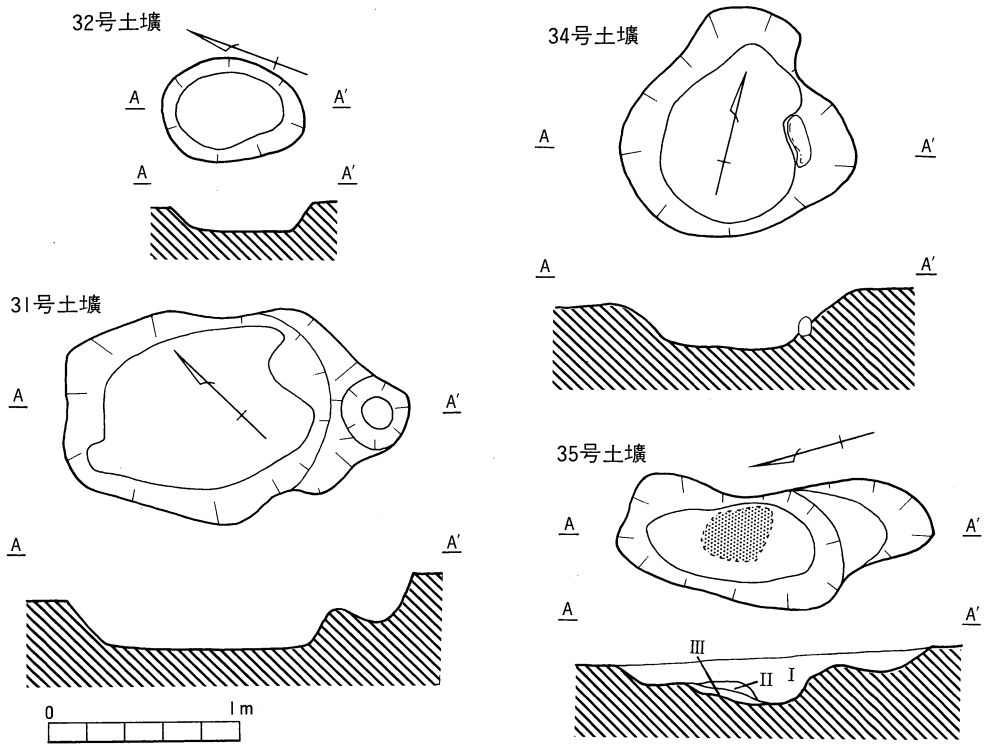
第5図　土壙実測図　2



第6図　土壙実測図　3


21号土壙
24号土壙
26号土壙
33号土壙
28号土壙
27号土壙
16号土壙
18号土壙
30号土壙
29号土壙
A
A′
I
II
III
IV
V
0
1 m

第７図　土壙実測図　4



第８図　土壙実測図　５

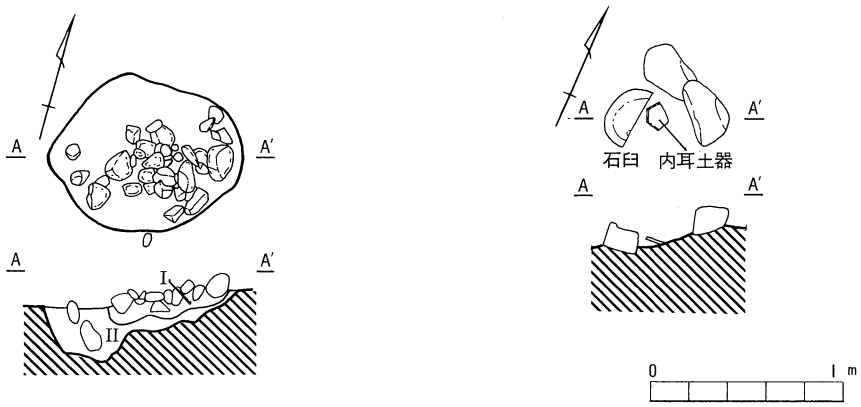
３号)、長方形を呈するもの（５号）がみられ、深さは比較的に浅い。個々の土壙の特徴をみてみると、１・２・13号土壙のように、整った形状を示さず土壙の内外に幾つかの小穴を有している。また３基共、覆土中に焼土や炭化物の混入が認められ、火焼状況を示している。特に１号土壙は、底面中央部より灰を多く含む焼土痕（スクリーントーン表示）が顕著に認められ、拳大から人頭大の転石が混入し、それといっしょに石鉢・石臼と内耳土器片が伴出している。13号土壙に至っては、決め手となる遺物の出土は認められなかったものの、検出面上にピット状の焼土がみられ、内部に多くの小穴を有している点で、１・２号と同類のものと考えた。３号土壙は、唯一長方形を呈するもので、覆土は黒褐色の単層であるものの縄文時代の土壙に比べしまりが弱く、他の中世の土壙にも共通性がみられる。35号土壙は、形状では３号に近い楕円形を呈するものの、底面中央部に１号同様の焼土が認められた(スクリーントーン表示)。出土遺物は、内耳土器が多く、土師質の小皿、陶器の丸皿、石鉢・石臼などがみられる。このような特徴から、土壙の性格を推論してみると、墓址としての可能性が高い。特に１・２・13・35号土壙は、火葬墓ではないかと思われる。しかし、土壙中より骨片の出土がまったくみられないことから、墓址としての断定はできない。

２．　集　石　炉　（第９図）

J—12グリッドに位置する。102×86cmの規模でほぼ円形を呈し、掘り込みは段を有する二重構造になっている。覆土は2層からなり、I層は粘性・しまりが共に強い黒褐色層で、II層は粘性がやや有りしまりが強いローム粒子を多く含む黒褐色である。内部からは、ほとんどが火熱を受け赤褐色を帯び、もろくなった57個にも及ぶ拳大の礫が出土しており、特にI層中に集中していた。石質は、安山岩・花崗岩・輝緑岩などの在地に多くみられる火成岩がほとんどで、また粘板岩・砂岩も含まれている。

3．　配　　石　（第9図）

6号土壙の南側、D—9グリッドに位置している。人頭よりやや大きな転石2個と半割の石臼より「コ」の字型に囲っている。その中央部には、二次焼成を受けてかなり脆くなっている内耳土器片が認められるが、転石や石臼には火焼状況は認められない。また、下部には土壙状の落ち込みは確認することはできなかった。



第9図　集石炉・配石実測図

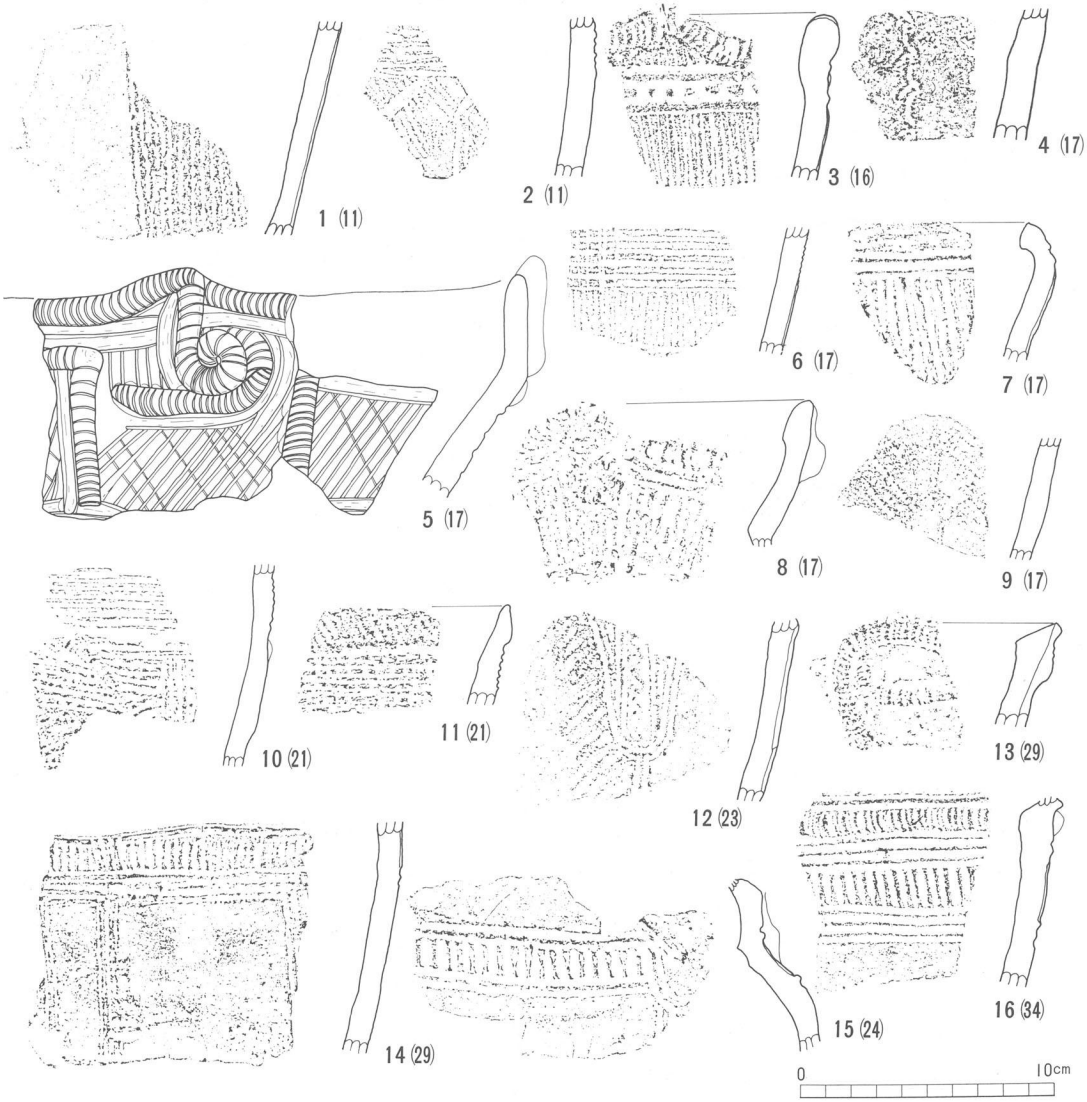
第3節　遺　　物

1．縄　文　土　器　（第10・11図）

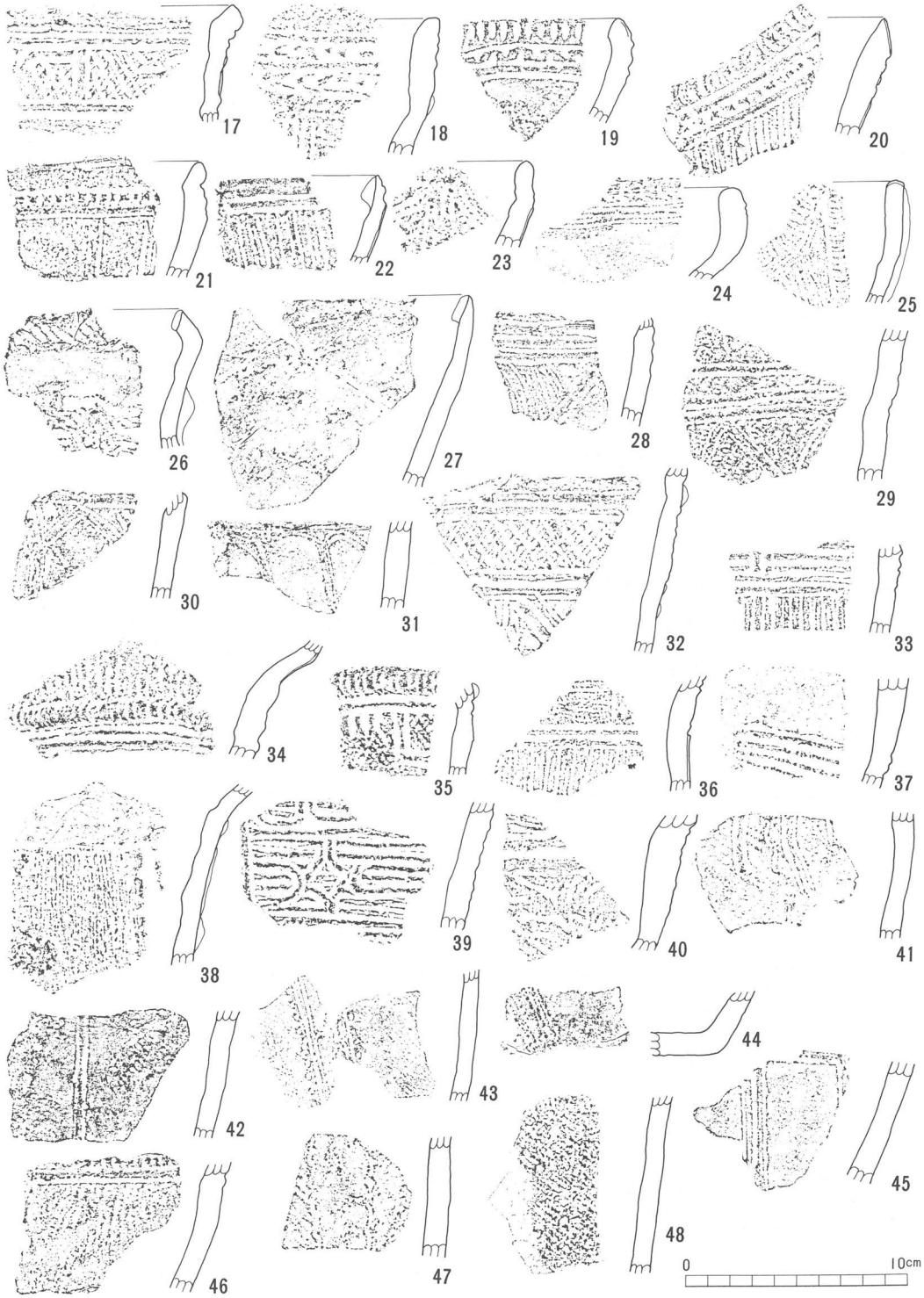
土壙及びグリッドから出土した土器は、口縁部形態から推測される器形ないしその独特な文様構成から、縄文時代中期初頭に位置する梨久保式の特徴を有するものである。器形は、完形もしくは復元可能なものはまったく出土していないものの、口縁形態からキャリパー型と筒型の深鉢のみの出土であり前者のものが主に多くみられ、浅鉢は認められなかった。文様構成をみてみると、半截竹管状工具による沈線文を文様の基本とし、爪形文や押し引き文を多用するものや、縄文を地文として多用するものが多くみられる。

口縁部が内湾して立ち上がるキャリパー型が呈するものは、頸部で「く」の字状に屈曲し胴

部はゆるやかにふくらみをみせる形態をするものと思われ、ほぼ4単位からなる波状口縁を呈するものが多い（3・5・8・13・20・21・23・25)。文様構成をみてみると、5・8・13・25は口唇部に爪形文を施し、渦巻ないし懸垂する爪形隆帯文を貼付するもので、5においては格子目状沈線文、8・25は縦位の平行沈線がみられる。3・20・23には横位に瓦状の押し引き文と縦位平行線文によるものである。また、18・21は縄文と瓦状押し引き文が、26は縄文と無文部を有し三角状貼付文を施される。19は刻み目と波状沈線が、24は瓦状押し引き文と横線が施され、共に無文部を有する。7・22は横線文区画の縦位平行沈線である。円筒型をみてみると、11は縄文と瓦状平行押し引き文によるもので、17・23は横線文と縦線文とによって区画される格子目文が施される。27は内面に折り返しがみられる口縁で無文のものである。



第10図　出土縄文土器拓影図　Ⅰ（(　)内は土坑番号）



第11図　出土縄文土器拓影図　2

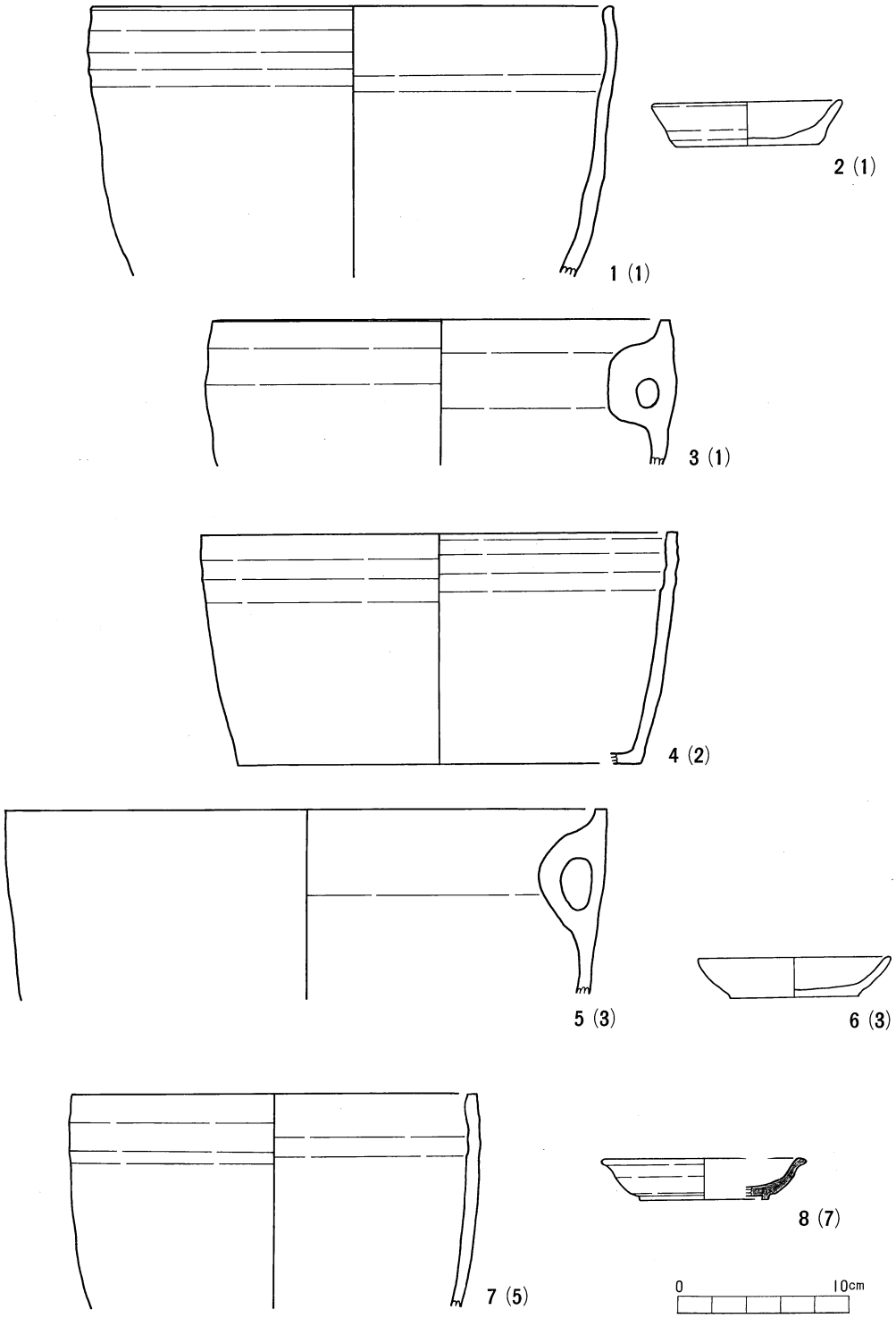
次にキャリパー型を呈する器形の胴部文様帯をみてみると、連続する懸垂文が多く認められる。2・28・29・30・31はY字状文もしくは弧状文であり、31を除けばすべて縄文を地文とするものである。それに対して14・42・45は平行する横線文から一定間隔を持って縦位に垂下するT字状文で、縄文を施すもの（42）と、無文のもの（14・45）とに分かれる。また、特異なものとして12のように、U字状の懸垂文もみられる。横位・縦位の平行沈線により器面を埋めるものとしては、6・10・14・15・16・33・34・36・38がみられる。16・34は屈曲する頸部に爪形隆帯文を施すもので、特に16はその下を横位沈線文に区画された縦位平行沈線文であり14と類似性が強い。15は頸部にV字状貼付文が、38はボタン状貼付文が施される。その他39はU字・菱形文による構成で、40は細線文を地文として不規則な沈線文を施し、1は棒状工具による縦位の平行押し引き文である。尚、縄文を地文とするものは、4・9・41・47にみられるような結節縄文が多く、結節を有さないもの（46・48）もみられ、41・42・43のように沈線文との組み合わせが全体的に多くみられる。

2．土師質土器・陶磁器（第12・13図）

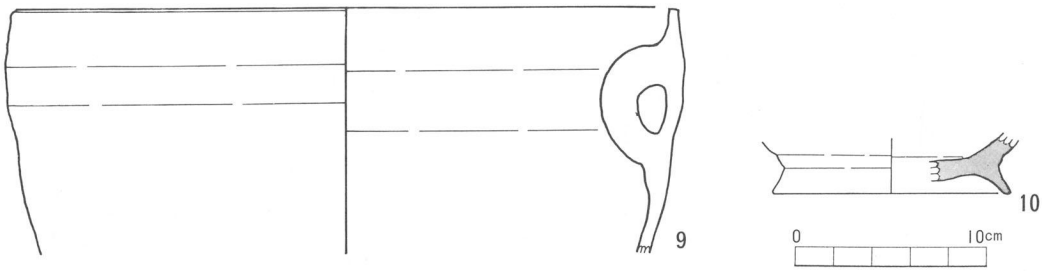
内耳土器は、調査区内より12個体もの出土が認められ、完形品はみられなかったものの、器器の判別できるもの6個体であった。1は、内湾ぎみにゆるやかに立ち上がる形状をし、口径30.6cmを測るが胴下半部と耳部を欠損する。内外面は、ロクロ成形によるロクロナデが明瞭に残り、口唇部は面取りされない。3は、口径26.7cmで内湾ぎみに立ち上がる形状をし、口唇部は面取りされる。4は、ほぼ直立気味に立ち上がりをみせ、内外面共にロクロナデが明瞭に残るもので、口径27.9cm・器高13.5cm・底径23.4cmを測る。口唇部は面取りされ耳部は欠損する。5は、口径35.1cmを測りほぼ直立ぎみに立ち上がる。耳部の穿孔は3のそれよりも大きく、また口唇部は面取りされる。7は、やや内湾ぎみに立ち上がるもので、口唇部は面取りされ、ロクロナデが残る。口径は23.7cmを測る。8は、やや内湾ぎみに立ち上がる形状で、口径34.8cmを測る。また口唇部は面取りされる。尚、1・3は1号、4は2号、5は3号、7は5号の各土壙より出土している。

土師質の小皿は、1・3号土壙よりそれぞれ1点ずつ認められる。2は、ほぼまっすぐに短く外開する形状をするもので、ロクロ成形、底部糸切り手法による作出がなされる。口径10.8cm、器高2.7cm、底径8.4cmを測る。6は、やや内湾ぎみに立ち上がる体部で、2と同様にロクロ成形・底部糸切り手法の作出である。口径11.1cm、器高2.4cm、底径7.5cmを測る。

陶器では、7号土壙より8の美濃大窯期に属する灰釉の丸皿が出土しており、内面には印花文がみられる。口径12cm、器高2.4cm、底径7.5cmを計り、16世紀の所産と思われる。また、陶磁器のほとんどが、10の高台付すり鉢を始めとする、近世所産のものであった。



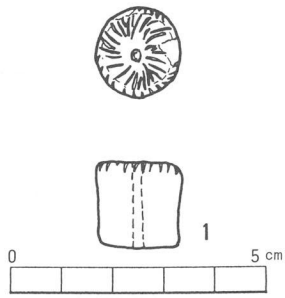
第12図　出土土器・陶器実測図　1（(　)内は土坑番号）



第13図　出土土器・陶器実測図　2

3．土　製　品　（第14図）

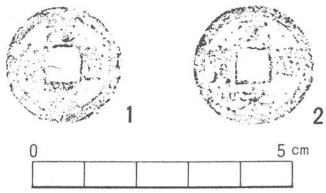
1は、土製の耳栓である。直径1.8cm・高さ1.8cmの円柱形を呈しており、柱状部の中央はややくびれている。裏面中央部から表面中央部へ穿孔がなされ、表面中央部から側縁にかけて放射状に細かな沈線文様が施される。



第14図　出土土製品実測図

4．銭　　貨　（第15図）

1は、篆書体の「元豊通宝」で北宗・元豊元年（1078）鋳造の渡来銭である。表裏面の磨耗が著しく鋳字はあまりはっきりとしない。2は、「寛永通宝」である。また1・2共、青銅製である。



第15図　出土銭貨拓影図

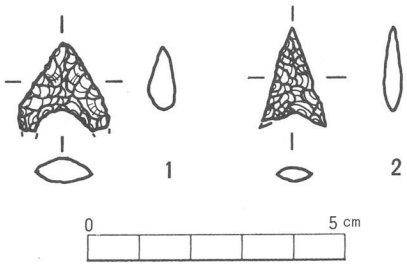
5．石　　器　（第16～20図）

石　　鏃　（1、2）

1は、基部両端を欠損する凹基無茎石鏃で、基部における抉りが深く幅は広めで、先端部の著しい鋭さはみられない。2は、基部片端を欠損する薄手の凹基無茎石鏃である。基部の抉りは浅く端部は鋭く尖っており、先端部も1と比べ鋭くなっている。石質は1・2とも黒曜石である。

打　製　石　斧　（3～14）

本調査において最も多く出土した石器であり、未製品や欠損品も含めると総数20個体に及ぶ。しかし、遺構出土のものは3個と少なく、グリッド出土か表採によるものがほとんどである。



第16図　出土石器実測図　1

3は、側縁部は細かく調整が加えられ刃部近くに磨耗痕が残る。4は、側面に自然面を残し、細かな調整が加えられているものの、刃部はやや斜めになる偏刃である。5は、典型的な短冊形を呈するが、下半分を欠いている。6は、使用度が著しいためか、

刃部が後退している。7は、側面に自然面を残し、刃部近くに磨耗痕を残す。9は、やや反り身で、刃部の後退が著しい。10は、中央部より上半部を欠損している。側縁部においては打撃による調整が行われるものの、刃部は丁寧な研磨による作出をしており、局部磨製石斧の可能性が考えられる。11は、刃部は偏刃で磨耗痕が残る。12は、楕円形状に丁寧な作出をしており、頂・基部共刃部と思われる。13は、自然面の残る剝片の側縁部に細かな調整を加えた撥形を呈するもので、刃部は直刃に近く、一側縁に浅い抉りを入れている。14は、13と同様の撥形を呈するものである。石質は3・4・7が粘板岩、5・6・10～12・14が砂岩、9が硬砂岩、8・13が緑泥片岩である。

磨　製　石　斧　(15～18)

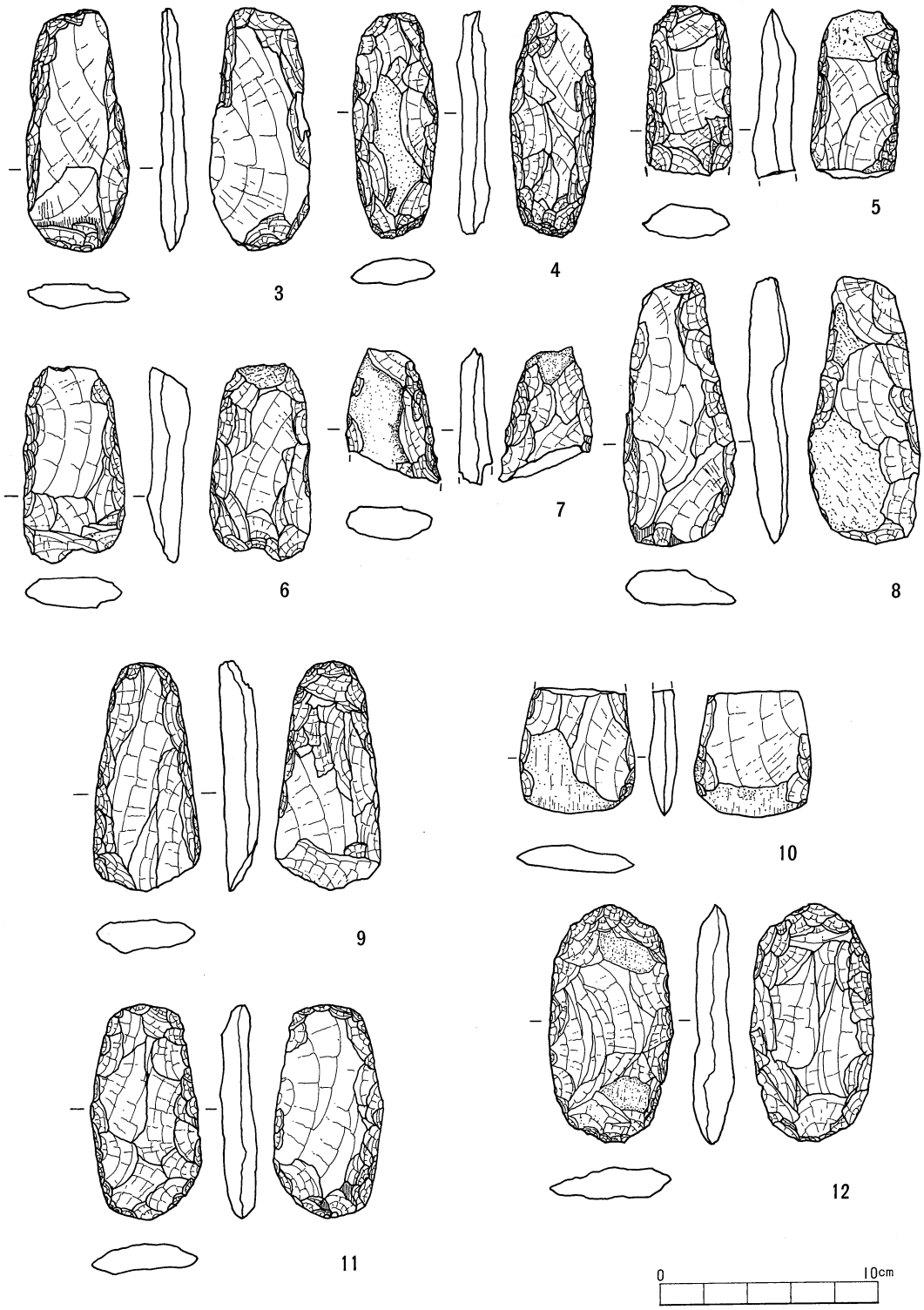
15は、中型の乳棒状を呈するもので、研磨による調整後、側縁部の中央部をやや抉るように敲打を加え、柄の取り付け部を作出しているものと考えられる。また、基部だけでなく頂部も刃部としての激しい使い込みがされたためか、後退が著しく磨滅している。16も、ほぼ15と同型のもので、側縁部には敲打痕が認められ、頂・基部の刃部の後退が著しい。17は、大型の乳棒状磨製石斧の仲間として考えてよいであろう。側縁部中央には敲打によるゆるやかな抉り込みを入れ、その後に研磨による仕上げを行っている。頂・基部共、刃部として激しい使い込みがなされ、一方の側面にむかって大きく剝離している。石質は、15・16・18が緑泥岩・17が輝緑凝灰岩である。

磨石・敲石・凹石　(19～24)

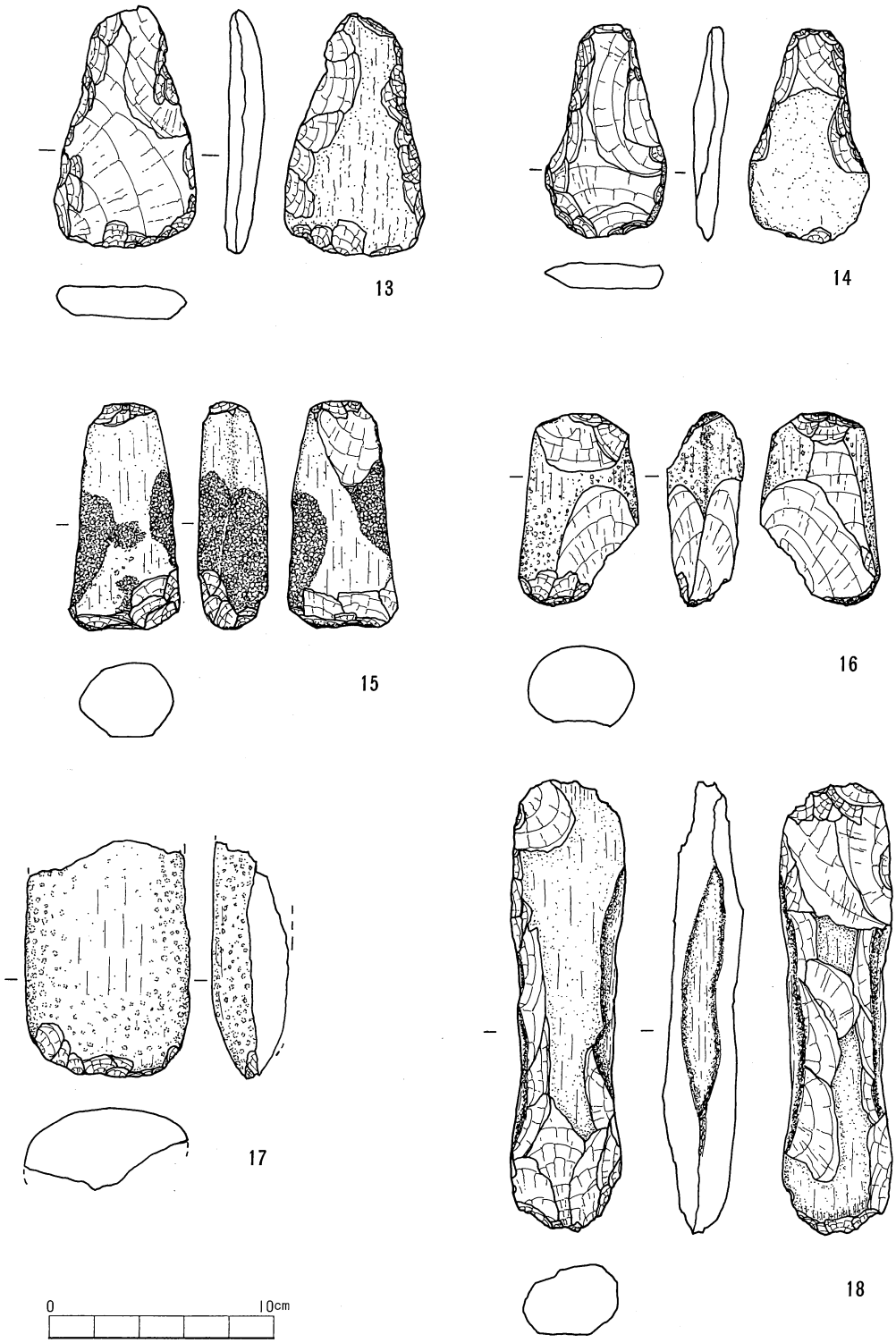
19は、全体的に丁寧な磨痕がみられ、頂・基部には敲打痕が認められる。20は、稜を持って磨面を形成している。21は、中央部より欠損するものの、20と同様に磨面を有するものである。22は、ある程度形のととのった転石を使用しているもので、著しい使用痕は認められない。23は、一側面の中央部に凹痕を有し、側縁部・裏面は著しい磨痕が認められる。24は、偏平な転石を用い、表裏面のほぼ中央部に2ヶ所ずつ凹痕を持ち、側縁部には磨痕を有し、基部における剝離と磨滅状態は石斧としての使用状況を示すものと考えられる多様石器である。石質は、19・22・24が砂岩、20・21・23が花崗岩である。

石　臼・石　鉢　(25～27)

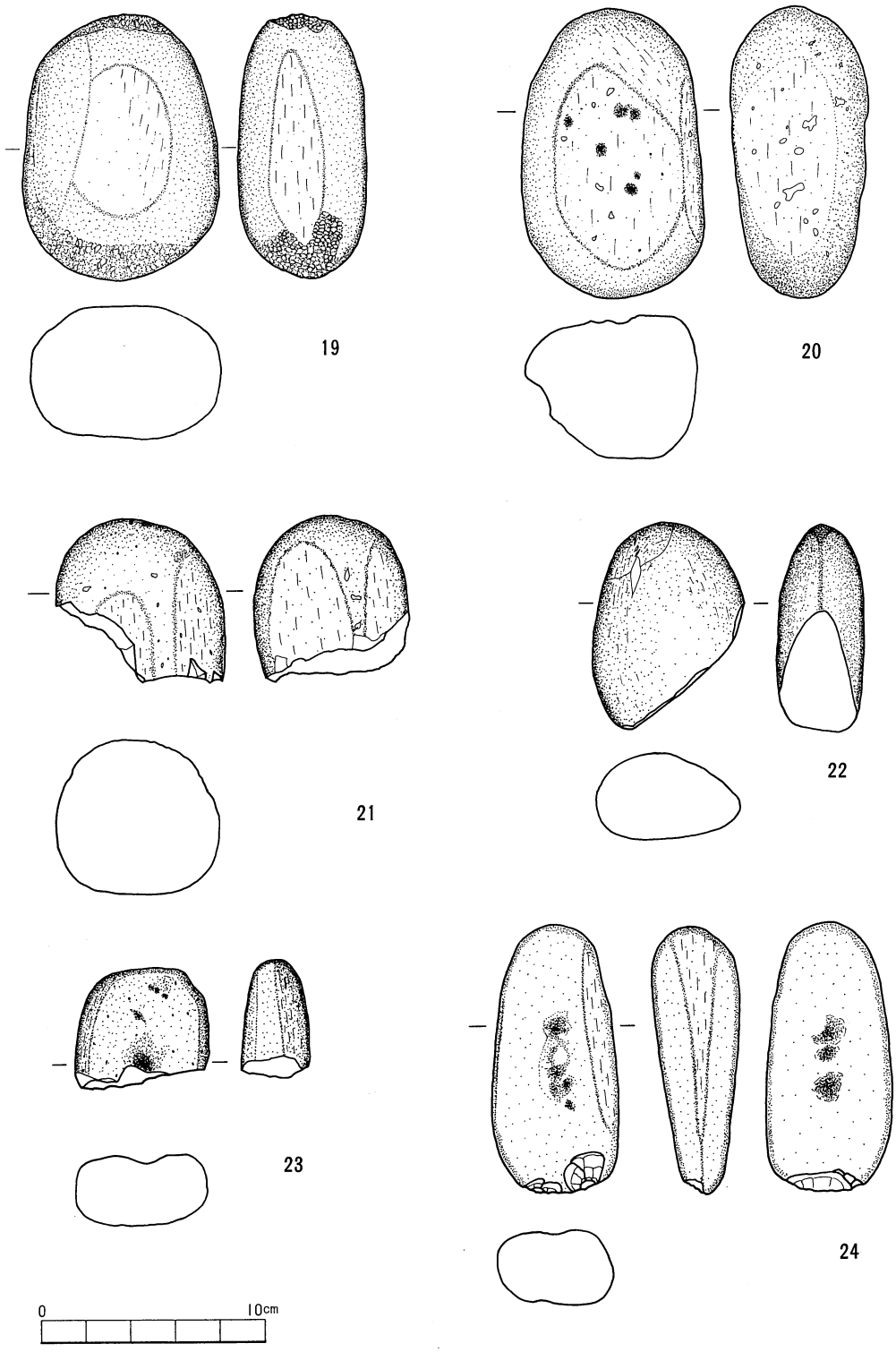
25は、配石より出土した半割した石臼である。26・27は、1号土壙より出土した石鉢である。26は、半割し風化が著しいものの内面は鉄製工具による彫り込みがなされ、底部は平らに仕上げてある。27は、石鉢の口縁部のみの破片であるが、体部は内湾して立ち上がり口縁部は面取りし仕上げられる。内面には炭火物の付着が著しく、内部で火を燃やした感じがうかがえる。石質は、25が花崗岩、26は安山岩、27は軽石である。



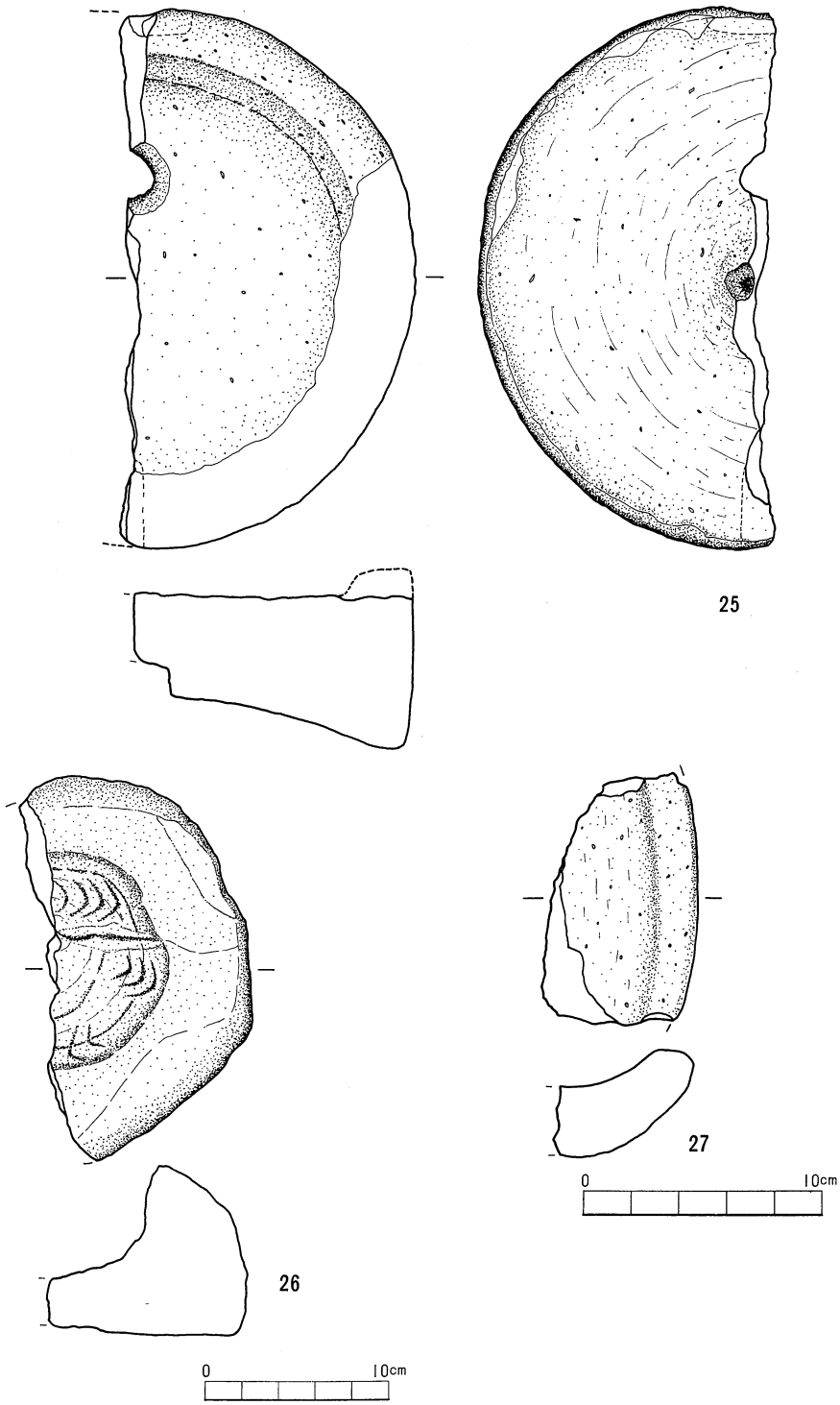
第17図　出土石器実測図　2



第18図　出土石器実測図　3



第19図　出土石器実測図　4



第20図　出土石器実測図　5

第Ⅳ章　ま　と　め

普済寺遺跡の調査の結果、縄文時代、中世の各遺構とそれに伴う遺物及び近世の遺物を検出することができた。以下、その詳細について述べてみたい。

縄文時代の遺構としては、23基の土壙と集石炉１基の検出であった。土壙からは、半截竹管状工具による沈線文や縄文を多様して幾何学的文様構成を行う、いわゆる縄文時代中期初頭時期に属する梨久保式の特徴を示す土器の出土がみられた。土器はすべて器形の判別のつかない細片ばかりであるものの、その文様構成から何種類かに分類が可能であった。しかし、それからは時間的変遷を追うことはできず、本土器群及び土壙を縄文時代中期初頭とする一時期ものとして捕えられよう。土壙は、その分布状況をみるとその大半が調査区の北西部に集中しており、土壙群を形成していると考えられる。それは、更に周辺部に広がると思われるが、調査区の西側は開墾による地盤の削平が認められるため、遺構は既に破壊を受けていると思われる。また、調査区からは住居址などの居住施設の存在が明らかにできなかったことを考えてみるとこれらの土壙群は一種の墓域としての役割を持つものではないかと推測されよう。自然条件からみても、土壙群は北風の直接当たる台地の北面に位置し、集落を構えるには、かなり条件が悪かったのではないかとも考えられよう。しかし、集石炉の存在は明らかに生活の痕であり、必ず周辺に居住施設が存在するではないかと考える。

中世の遺構は、９基の土壙が検出された。土壙は特に調査区の北東部に集中し、内部に火焼状況を示すものもみられた。やはり縄文時代の土壙群と同様に、これらの土壙も一種の墓壙群として考えるのが妥当であろうか。また、伴出する内耳土器・土師質小皿・灰釉丸皿などの遺物からは、本土壙群はほぼ16世紀代に位置づけられよう。ともかく、本遺跡より谷をへだてて南に位置する上の平城址とは3～400年の時間的開きがあり、それとの関連性はほとんど考えられない。更に、本遺跡からは古銭・陶磁器などの近世遺物が多数出土している。しかし、遺構の確認はみられず、多くの疑問を残す結果となった。

末筆ではありますが、本調査に御協力いただきました調査団の方々、並びに太田文陳氏を始めとする南小河内地区の皆様に、厚く感謝申し上げます。尚、長年に渡って町の発掘調査に従事していただきました藤森秀男氏が、今回の調査を最後に帰らぬ人となりました。故人におきましては、熱心にかつ敏速な判断力で調査の進行に多くの御努力をいただきました。ここに感謝の意を表するとともに、報告書の発刊を持ちまして改めて御冥福をお祈り申し上げます。

付表Ⅰ　土壙一覧表

番号	平　面　形	規　模(cm) 長径×短径×深さ	埋　土	時期	備　　考
1	不整楕円形	257× 150× 22		中	石臼、焼土
2	不整楕円形	188× 159× 20		中	石
3	不整楕円形	146× 64× 27		中	
4	円　　形	114× 104× 44	2分層	中	
5	楕　円　形	126× 90× 57	3分層	中	
6	円　　形	105× 91× 33	2分層	縄	花崗岩2ヶ
7	円　　形	182×(182)×36	2分層	中	
8	不整楕円形	160× 102× 86	2分層	縄	pitを1つ切る
9	楕　円　形	240× 160× 36	2分層	縄	
10	円　　形	( )× 147× 28		縄	石、11号土壙と切り合う
11	楕　円　形	( )× 183× 48		縄	10号土壙と切り合う
12	欠　　番				
13	不整楕円形	225× 115× 55	6分層	中	
14	欠　　番				
15	欠　　番				
16	円　　形	110× 88× 55		縄	27号土壙を切る
17	円　　形	( )× 100× 28		縄	22号土壙と切り合う
18	楕　円　形	( )× 112× 24		縄	30号土壙に切られる
19	円　　形	134× 134× 39		縄	
20	円　　形	140× 110× 39		縄	
21	不整楕円形	262× 168× 45		縄	
22	円　　形	136×( )× 44		縄	25号、17号土壙と東西で切り合う
23	不整楕円形	210× 168× 29		縄	
24	楕　円　形	90× 70×29.5		縄	
25	円　　形	( )× 122× 44		縄	22号土壙と切り合う
26	円　　形	138× 118× 35		縄	
27	楕　円　形	110× 56× 30		縄	16号土壙に切られる
28	楕　円　形	( )× 126× 35		縄	33号土壙と切り合う
29	円　　形	110× 108× 25		縄	
30	円　　形	102× 100× 38		縄	18号土壙を切る
31	楕　円　形	182× 114× 40		縄	
32	楕　円　形	72× 58× 16		縄	

番号	平面形	規模(cm) 長径×短径×深さ	埋土	時期	備考
33	円形	108×(　)× 37		縄	28号壙と切り合う
34	円形	124× 122× 30		縄	
35	楕円形	164× 66× 27	3分層	中	焼土

付表2　石器一覧表

番号	出土地点	器種	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	残存度(%)	備考
1	O－14	石鏃	黒曜石	(1.8)	1.1	0.5	(0.9)	90	
2	D－11	石鏃	黒曜石	2.0	0.7	0.3	(0.4)	98	
3	G－10	打製石斧	粘板岩	11.1	4.7	1.1	80	100	
4	B－6	打製石斧	粘板岩	10.4	3.9	1.2	80	100	
5	表採	打製石斧	砂岩	(7.7)	4.0	1.5	(70)	60	
6	B－6	打製石斧	砂岩	9.1	4.5	1.4	90	100	
7	7号土壙	打製石斧	粘板岩	(6.3)	4.0	1.5	(50)	50	
8	E－10	打製石斧	緑泥片岩	12.2	5.1	1.7	160	100	
9	15号土壙	打製石斧	硬砂岩	10.6	4.5	1.5	110	100	
10	表採	打製石斧	砂岩	(5.8)	5.3	1.1	(60)	50	
11	H－10	打製石斧	砂岩	9.9	5.0	1.2	90	100	
12	表採	打製石斧	砂岩	10.9	5.7	1.4	140	100	
13	M－8	打製石斧	緑泥片岩	10.8	5.8	1.4	160	100	
14	表採	打製石斧	砂岩	9.6	5.3	1.1	80	100	
15	11号土壙	磨製石斧	緑泥岩	10.3	4.2	3.3	250	100	
16	表採	磨製石斧	緑泥岩	8.6	5.0	3.3	(200)	30	
17	O－5	磨製石斧	輝緑凝灰岩	10.5	7.3	3.6	(390)	30	
18	A－7	磨製石斧	緑泥岩	20.2	4.2	3.2	500	100	
19	O－4	磨石(凹石)	砂岩	11.9	8.6	5.9	1,010	100	
20	34号土壙	磨石(凹石)	花崗岩	13.0	7.6	6.4	(790)	80	
21	表採	磨石	花崗岩	(7.2)	7.3	6.9	(505)	30	
22	1号土壙	磨石	砂岩	(9.5)	6.5	3.9	(310)	60	
23	表採	凹石(磨石)	(黒雲母)花崗岩	(5.4)	5.9	3.1	(120)	50	
24	表採	凹石(磨石・敲石)	砂岩	12.1	5.2	3.4	340	100	
25	配石	石臼	花崗岩	29.7	(15.6)	9.8	(5,000)	50	
26	1号土壙	石鉢	安山岩	21.0	(11.1)	9.3	(2,670)	50	
27	1号土壙	石鉢	軽石	(10.7)	(6.1)	3.0	(175)	15	内面炭化物付着

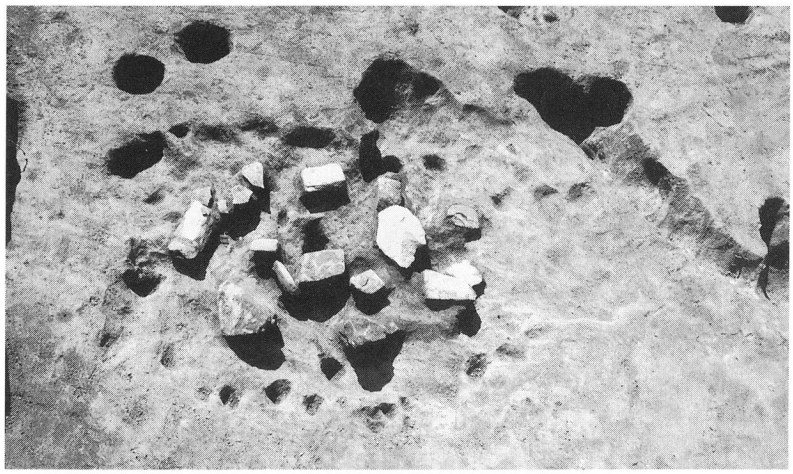
図　　版

図版1

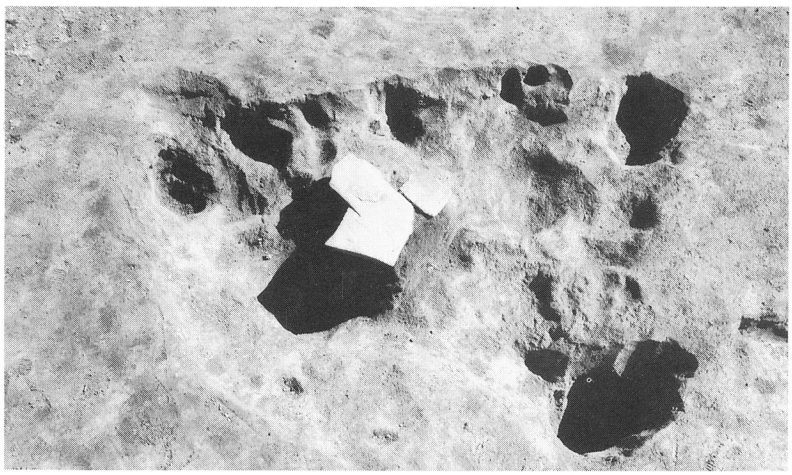
調　査　地　近　景

調　査　地　全　景

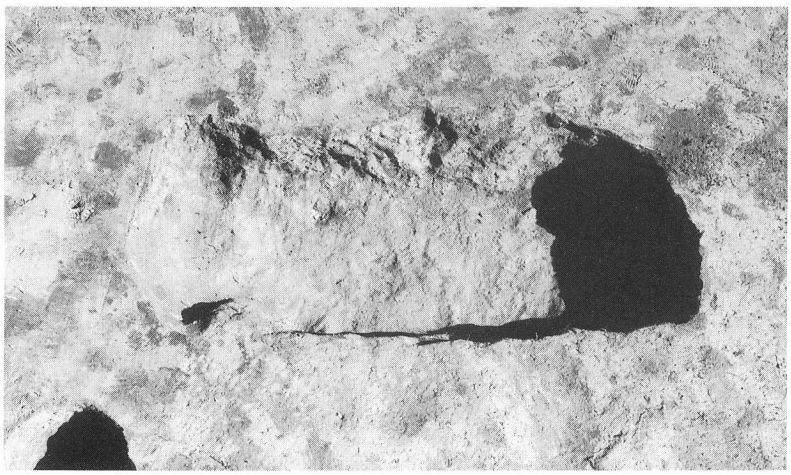
図版2



1 号 土 壙

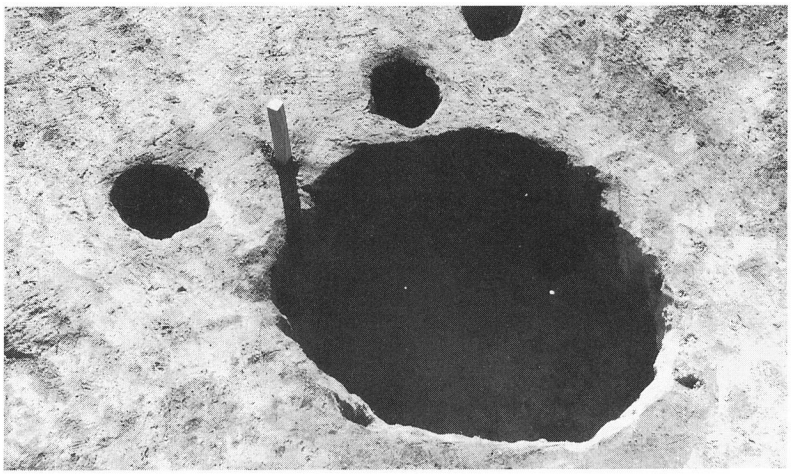


2 号 土 壙

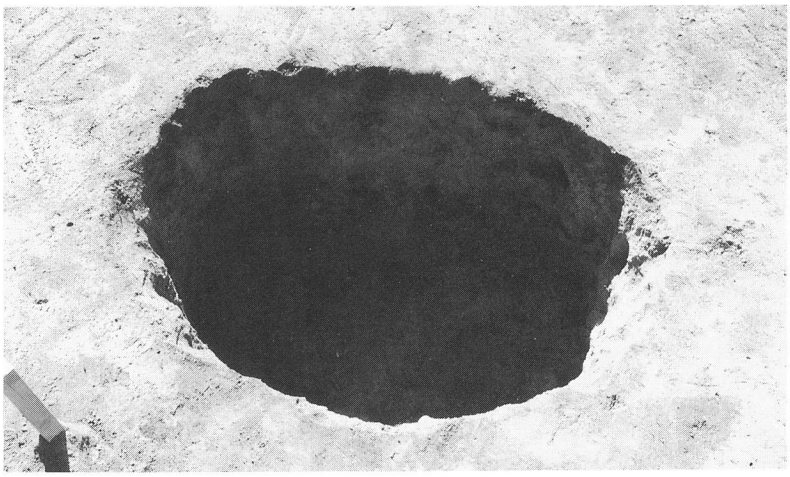


3 号 土 壙

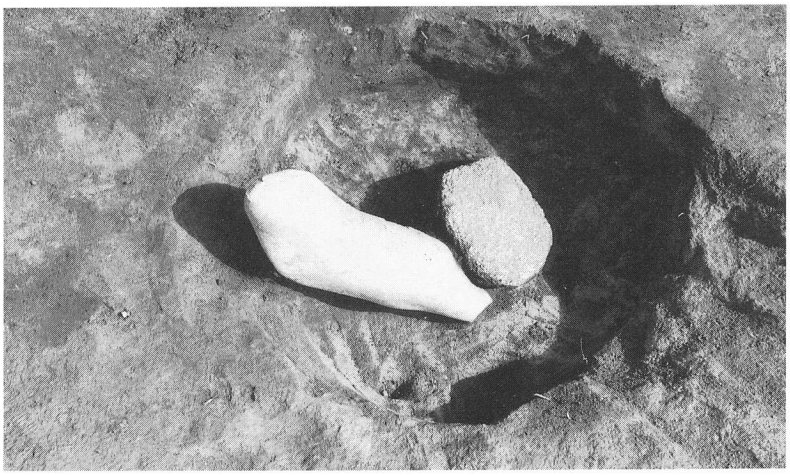
図版3



4 号 土 壙



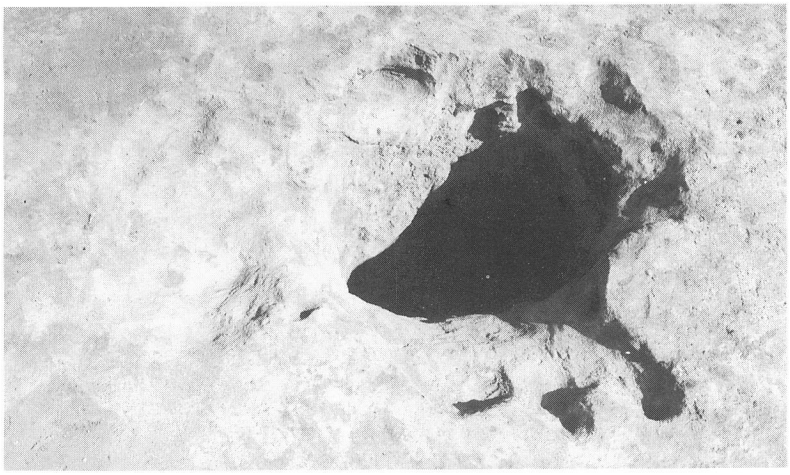
5 号 土 壙



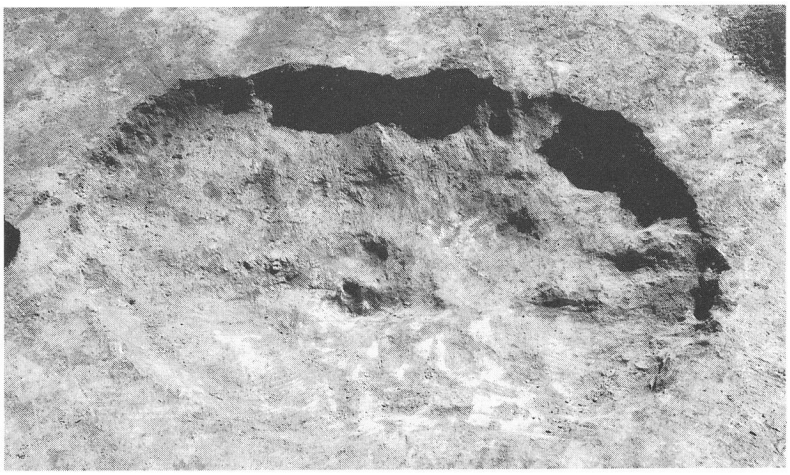
6 号 土 壙

図版4

7 号 土 壙



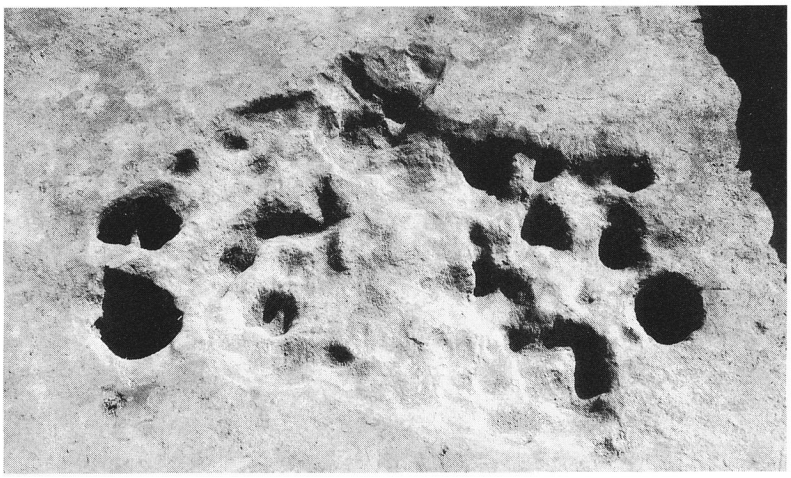
8 号 土 壙



9 号 土 壙

図版5

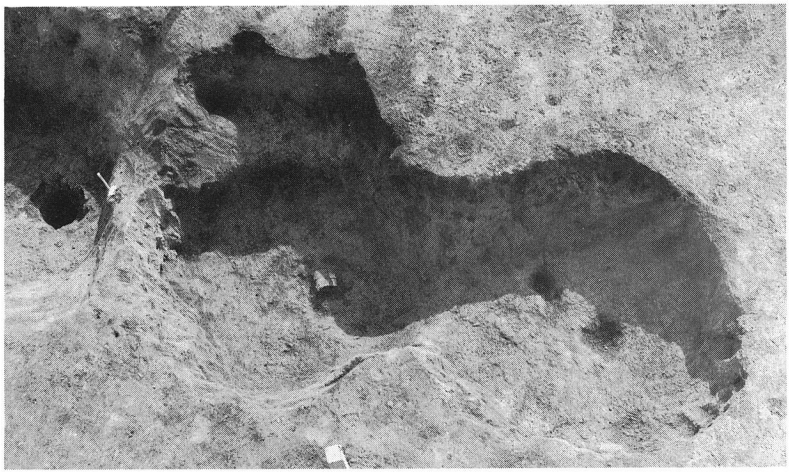
10・11号土壙



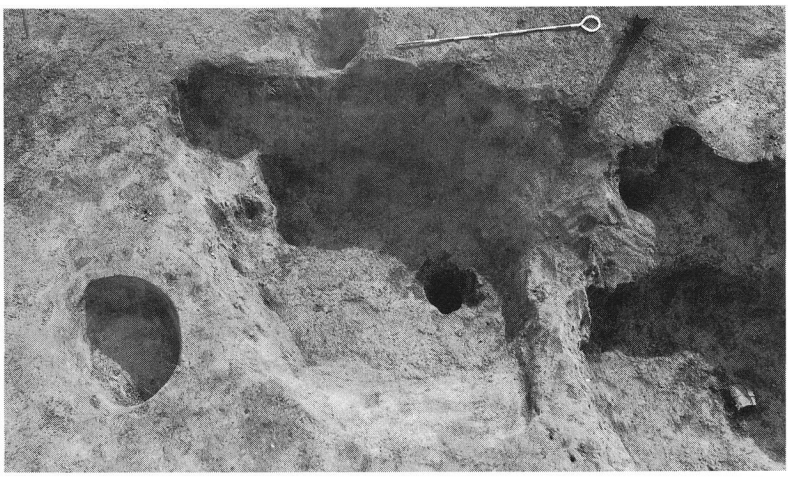
13 号 土 壙

16 号 土 壙

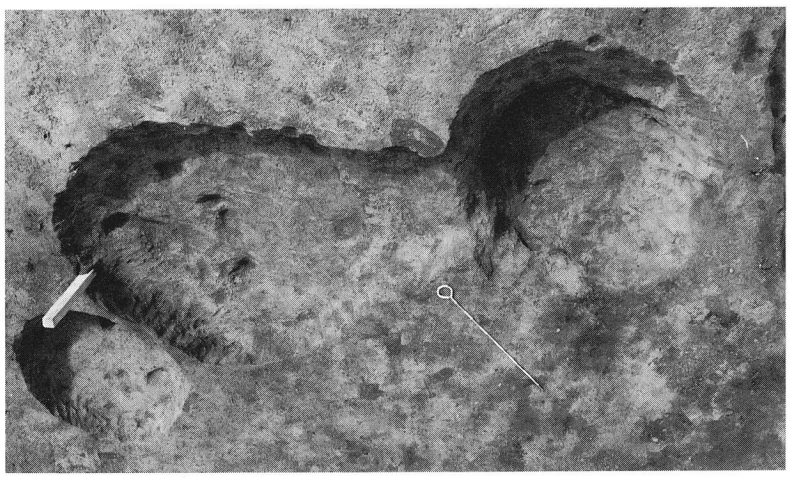
図版6



17・22号土壙



25号土壙

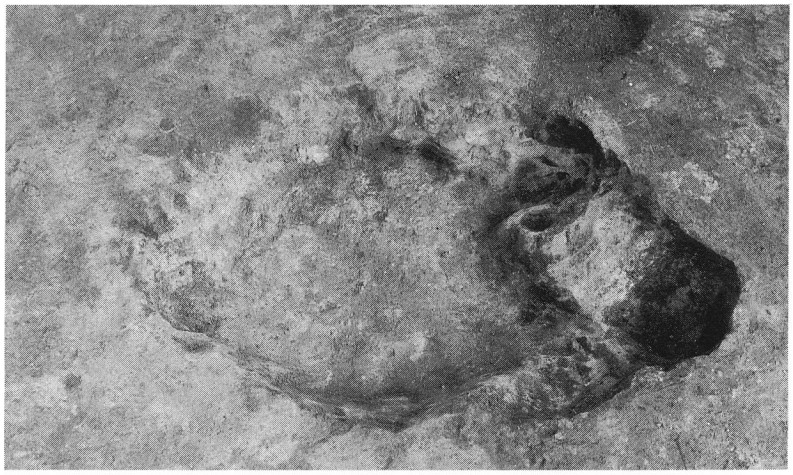


18・30・32号土壙

図版7

19 号 土 壙

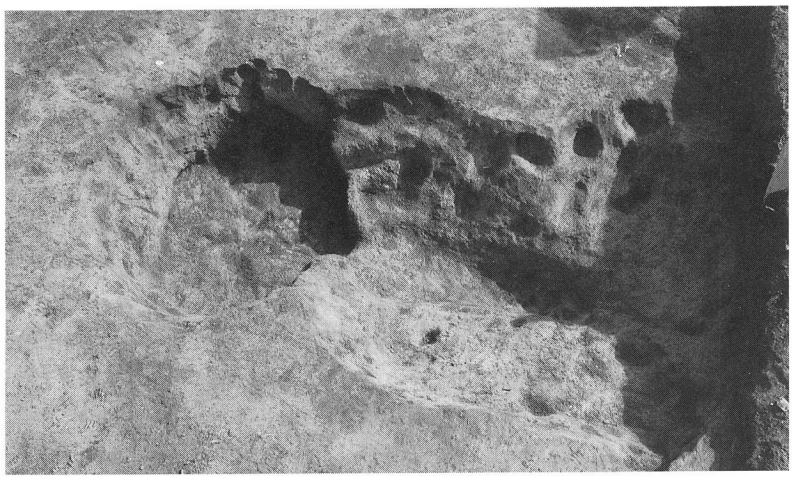
20 号 土 壙



21 号 土 壙

図版8

23 号 土 壙



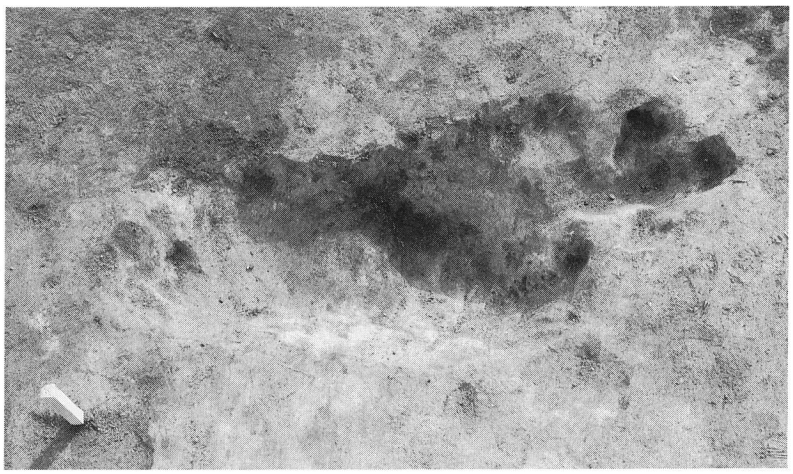
28・33 号 土 壙

29 号 土 壙

31 号 土 壙

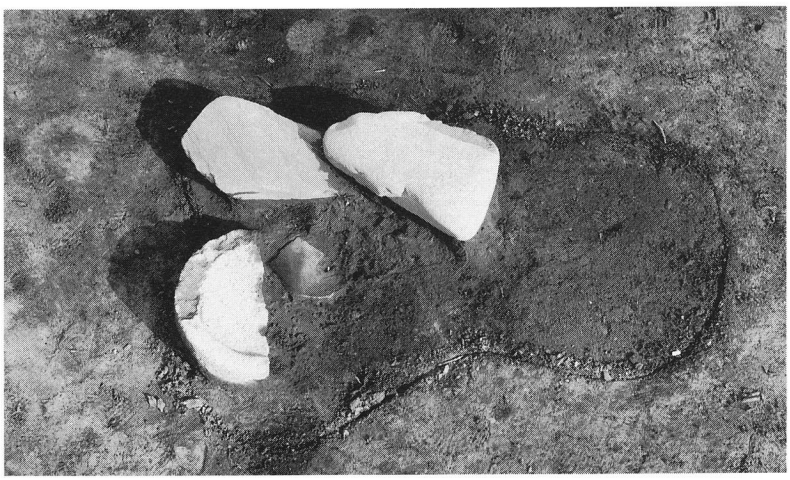
34 号 土 壙

35 号 土 壙

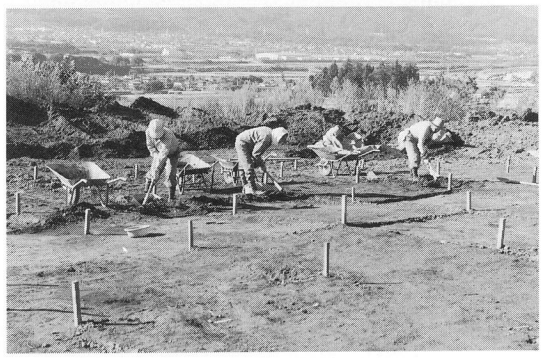


図版10

集石炉

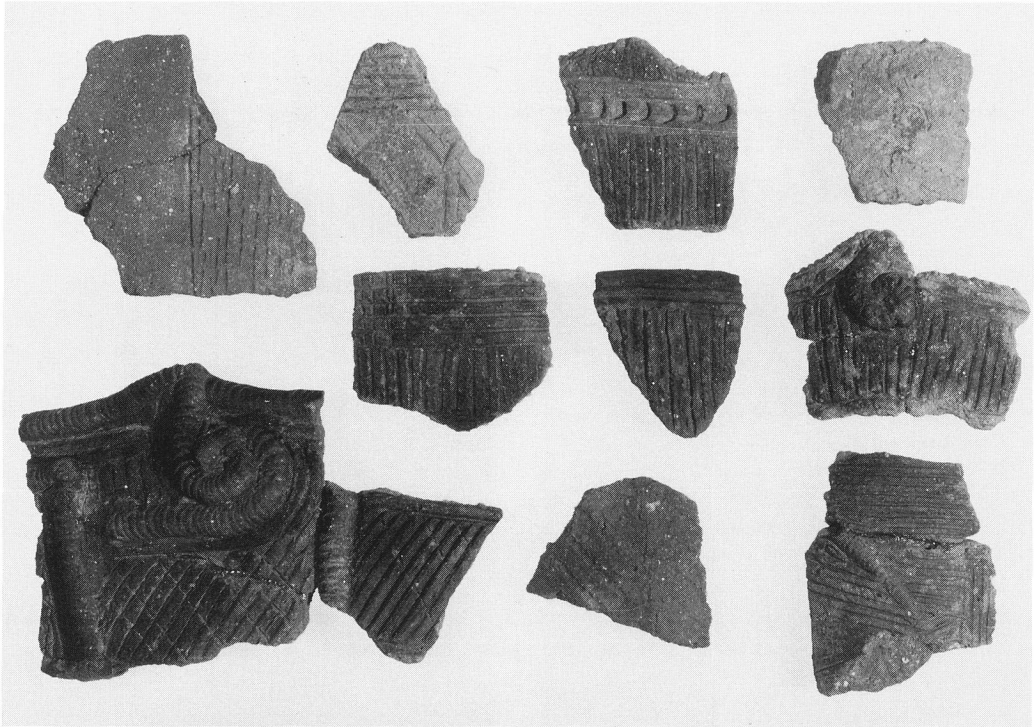


配石



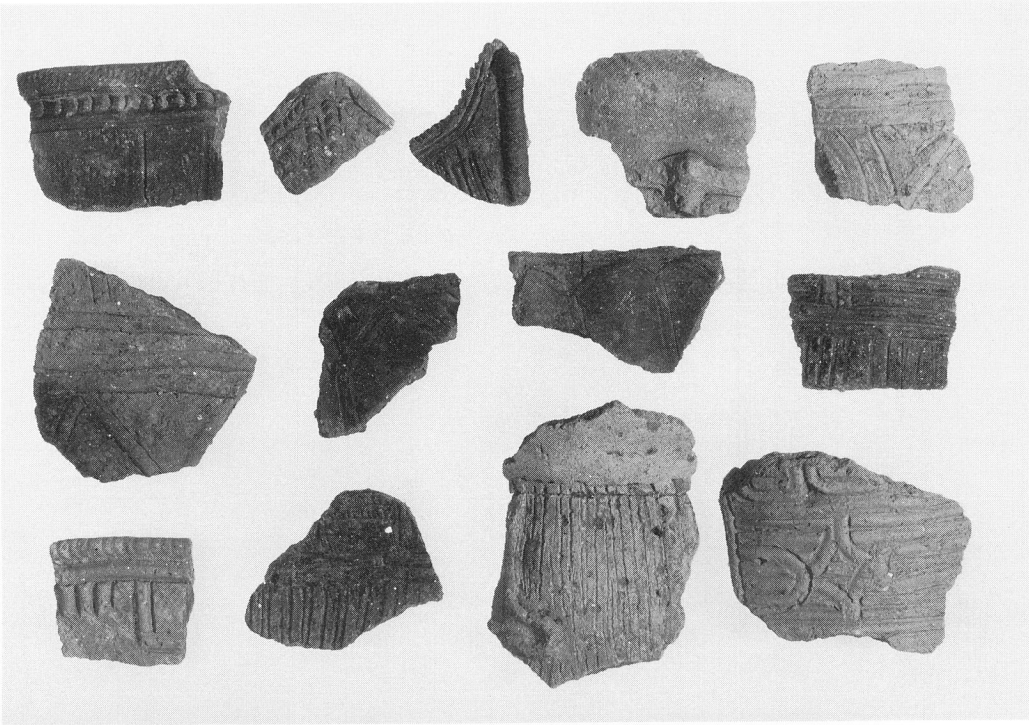
調査風景・調査参加者

図版12

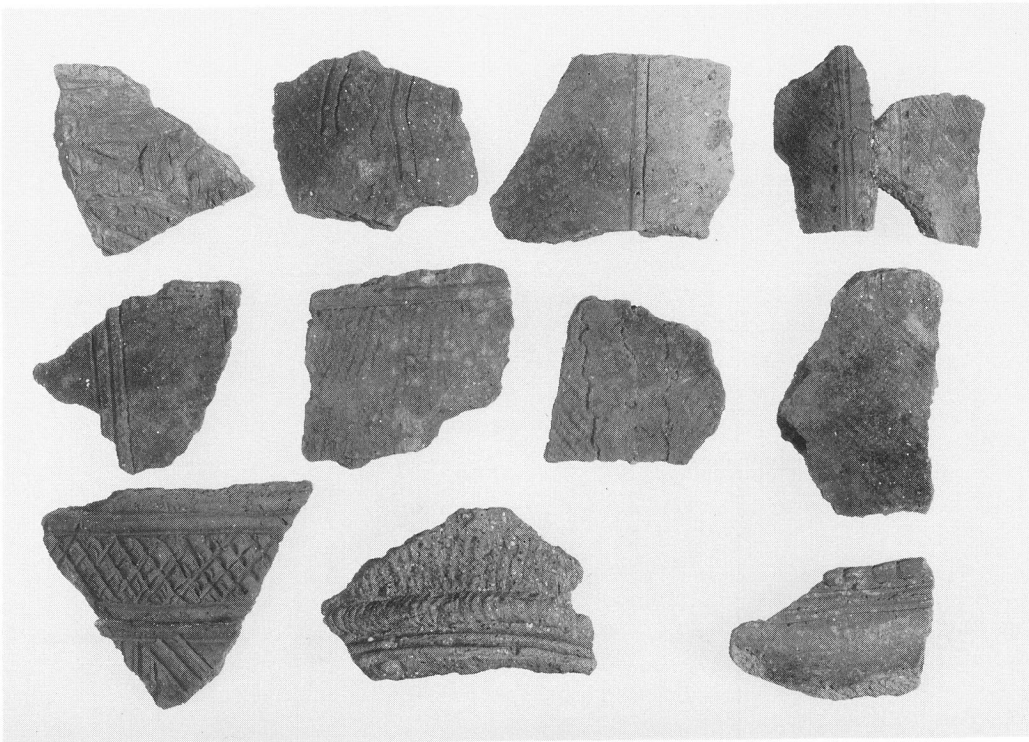


出土縄文土器　1

出土縄文土器　2

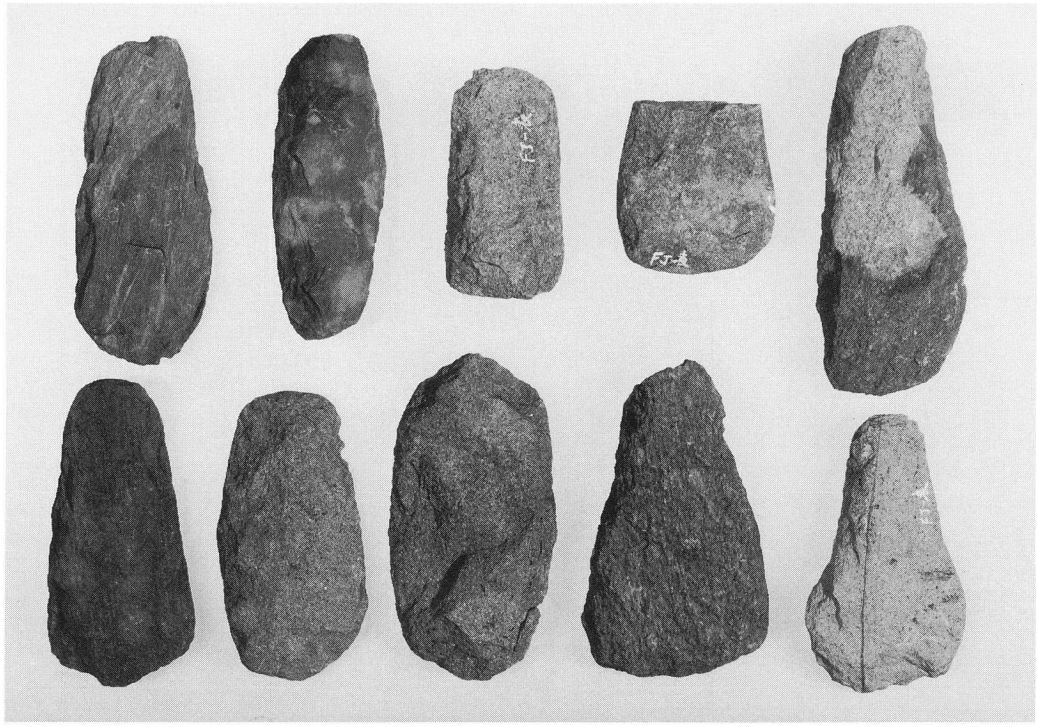


出土縄文土器　3

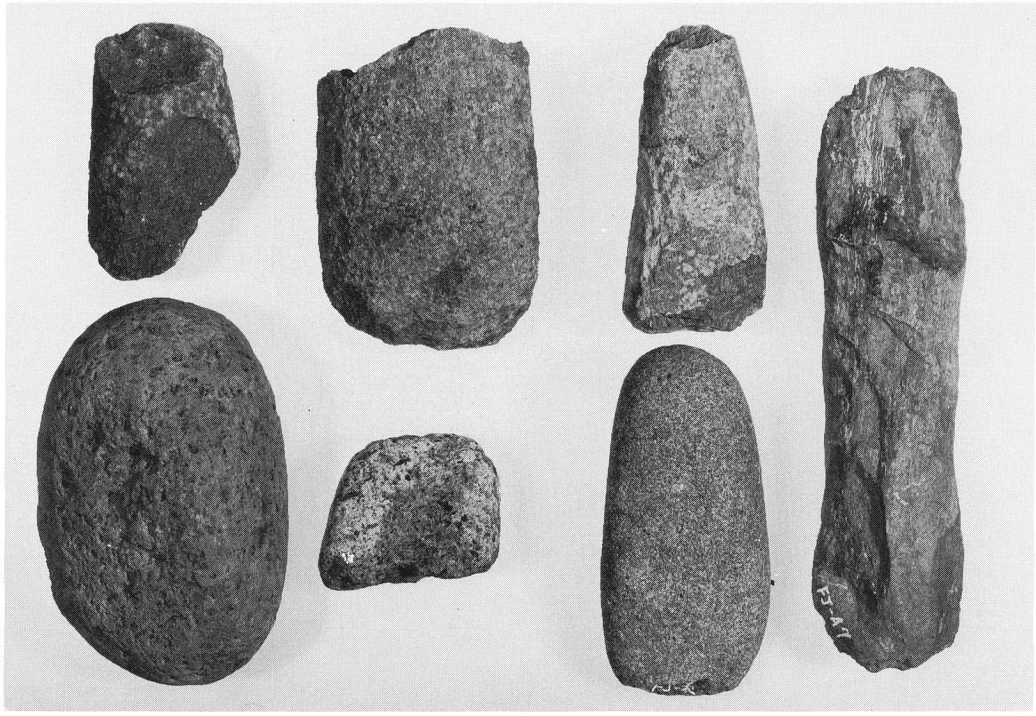


出土縄文土器　4

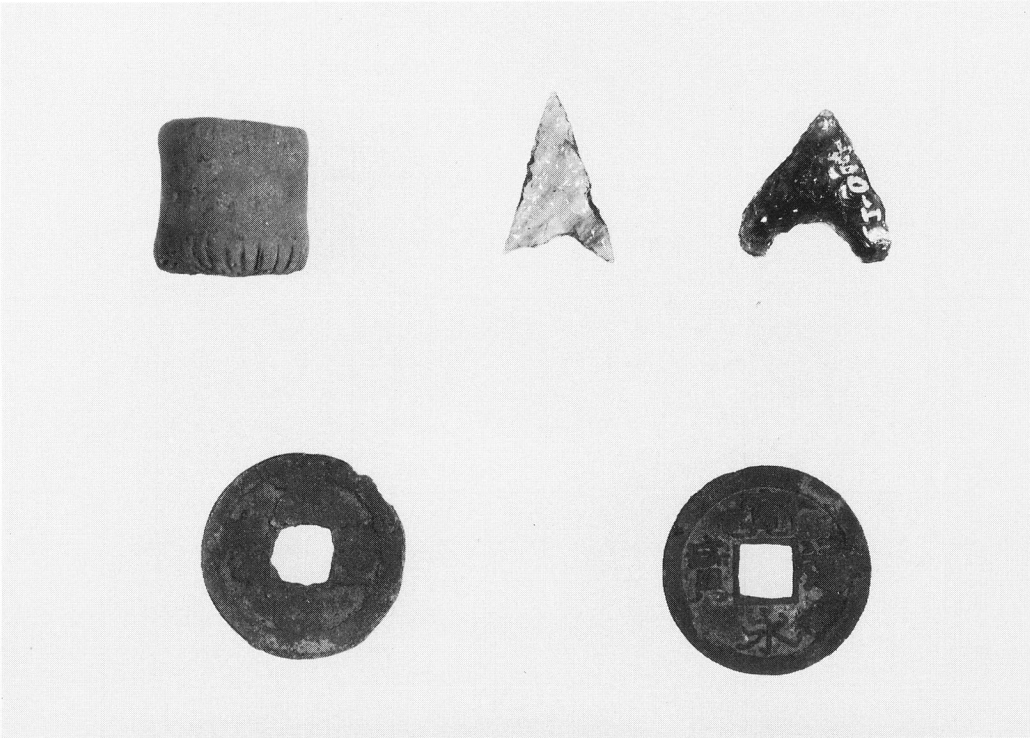
図版14



出土打製石斧

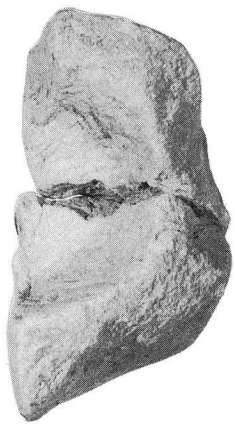


出土磨製石斧・磨石・敲石・凹石



出土耳栓・石鏃・銭貨

出土石臼



出土石鉢

普 済 寺 遺 跡

発掘調査報告書

平成元年３月31日　印刷
平成元年３月31日　発行

発行所　長野県箕輪町教育委員会
印刷所　ミ ウ ラ 企 画 書 籍